

小説  
イレブンス



3 イレブンス

第一樂章

## 狂気のクレッシェンド

## B

青いランプが点燈した。

それを確認すると、待ち構えていたように、ボーイはにこやかに俺を店の中へと案内した。

バードウン国、オルガシテイ。

バードウンの何処にでもあるような、鉱脈の上に建つ階層都市だ。

ただ、頼みの綱であった鉱業も鉱脈が衰退しつつあり、決して未来は明るくない。

治安は良いとは言えず、また、元々が工業都市であったため、家族で楽しめるような娯楽施設は何も無く、殆どの産業はすべからず荒廃している。

こんな街から去る者は数多くいれども、好んで来る輩は滅多にいない。

俺は、そんなシテイの第三階層のとあるバーにいる。

完全な<sup>生身の人間</sup>アダムニスト・バー。客から店員まで全てがアダムニストであり、店に入る前に入念なチェックが必要だった。

妙ちくりんなゲートに何回も通らされた。だが、やましい生体改造<sup>ボイジンク</sup>は何もしていないため、何のエリアも無く、するりとチェックをパスできた。

中は驚くほど清潔で明るく、きらびやかな内装に目が痛くなりそうだった。

奥の窓からは第二階層が遥か下方に見える。

何本ものエレベーターが、第二階層に垂れ下がっている。

そんな景色に目を奪われていると、横の方から声がかかった。

「珍しいか？ 見慣れた景色だろう？」  
見ると、奥の方から男が歩いてくる。

「トウコーダ。サスフォアだな？」

すっと、トウコーダと名乗った男は腰の銃を半分抜いて見せた。銀に輝く銃身と、今は珍しい火薬式のリボルバー。その腹には目をモチーフにした赤いレリーフが彫られている。

赤目は、アダムニストではない、いわゆるサイボーグとか、アンドロイド（総称してボージャーと呼ぶ）が中心となって運営する組織のシンボルだ。

年々とアダムニストとボージャーの間の差別が深刻な問題になっている。双方に固着した思想があるためである。赤目はこの差別問題の解決も目的に含まれている。

「あいにく、俺は平地で育ったんでね」

サスフォアはそっけなく言うと、手近なイスに腰掛け、ボーイにデスプリンガーを注文した。

デスプリンガーは強烈な甘さと強烈な酔いが特徴の果実酒だ。

果実酒ということでアルコール度数はそこそこだ

が、血中に浸透するアルコール量が半端ではない。

飲み方を間違えると確実に死が訪れるという、恐ろしい酒だった。

サスフォアは相手を試す意味でも、この酒を選んだ。

「で、赤目さんが何の用かな……」

「まず言っておきたい、俺はアダムニストだ」

トウコーダがサスフォアの隣に腰掛ける。

同時に、ボーイがデスプリンガーを2つ運んできた。

「知っているな、最近連続して起こる猟奇殺人事件……」

トウコーダは言うのと、グラスを口に近づけ、舐めるように酒を飲んだ。

わずかばかりサスフォアは目を見張った。

予期していたつもりでもあったが、あまりに慣れた手つきだった。

この行為で、幾分かサスフォアのトウコーダを見

る目が変わった。

「ああ。ボージャーだけが、老若男女を問わず惨殺されている。生体部分も、機械部分も跡形も残らない。その全てがミックスジュースにされて、袋詰めされて、各種報道機関、警察、軍にまで送付されるという」

「俺は何者の仕業か知っている」

「……」

「……サスフォア。君もね」

「……何が言いたい」

「こういう事件のおかげで、赤目の中のアダムニストに対する目に耐えられんのだよ、そろそろ解決させたい。だが、俺達だけには手におえない。……協力して欲しい」

「それだけか？」

「いや」

トウコーダは面白そうな目でサスフォアを見ている。

「あんたの事だから知ってるはずだ、ウチとしてもこれは厄介な事件なんだよ、それに近辺でまた戦争の気配だ、俺の身体は一つしかない」

「……………」

「失礼する」

最後に一口だけデスブリンガーを舐めると、サスフォアは立ち上がって出口へ向った。

「……コンチェルト、未完成な楽曲は果たして……………」

独り言のようなトウコーダの言葉をサスフォアは聞き逃さなかった。

サスフォアの目が初めて揺らいだが、長く伸びた前髪に隠されたそれは、他人に気付かせることを許さなかった。

シテイの頭上を一機の爆撃機が飛び越えた。

東の空はどんよりと曇っていた。

何かの始まりを、サスフオアは予感していた。

#### A

性が横たわっていた。

だが、その女性の胸から腰にかけては、金属製のパーツで構成されていた。

そう、その女性はボージャーなのだ。

よく人前で露出される顔、肩、手足などは、人間の皮膚そっくり構成されている。

ちよつと見ただけでは、人間をベースにしたサイボーグと間違われるかもしれないが、無論、有機回路や生体部品を使われてもいるが、彼女は全てが機械で構成されていた。そういう意味ではボージャーというよりも、一種のロボットに近かった。

今、マスターが会話していたのは、紛れも無くこのボージャーである。

マスターはボージャーの〈睡眠〉を利用して、その記憶を垣間見ていたのである。

その記憶は、過去の一点を境にすべてゼロの情報しかなかった。

「イレブンス……何か感じないか？ どうしても

眼鏡の少女の指が、ピアノストさながらにキーボードを滑っている。

モニターに文字の羅列が現れては消えていく。彼女は全てそれを読み、理解していた。

ふと、少女の手が止まる。何かを考えるようにその眼鏡ゆつくりと直した。

『マスター、どうしました？』

コンピュータのスピーカーから、女性の声が響く。「いや、なんでもない」

面白そうに口に笑みを浮かべると、再びキーボードに手を伸ばした。

マスターと呼ばれた少女の後ろには裸にされた女

思いつけないのか？」

『ええ、マスター……。ごめんなさい。マーキングが見つからないんです』

「そうか……」

眼鏡の少女は肩をすくめて、何かを考えるような仕種を見せた。

そもそも、こういった完全ロボティクなボーヂャーの記憶は（メモリ容量に限度があるため、ドリムに移されはするが）ほぼ全てが残される。いらぬ情報を取捨選択してデリートすることもあがるが、その記録も、履歴に全て残されるのだ。

第一、生産されて目覚めてからすぐに記憶のレコードが開始されるため、ゼロ領域があるのがまずおかしいのだ。これは、何者かによって、記憶を隠蔽されたと考えるしかない。だがしかし……。しかし、何の証拠も残さずにこれを操作することは、現在不可能とされている。

戦争におけるハッキングウォーを例に上げて考え

てみよう。

現在、戦争の形態としては、敵国の情報中枢にダイブして無人機のCPUや攻撃中枢を叩くのが主流といえた。

表面上武器を用いて闘うのは、陽動か時間稼ぎにすぎず、戦闘員に関しては流される血は大幅に減っている。

ではどうやって情報中枢に潜り込むのか、これにはいくつか方法があつて、軍部は日夜その研究に励んでいる。ある方法は、力づくでゲートを突破する方法だ。この場合、ゲートをこじ開けたときのいわゆる「壊れたゲートの破片」が残ってしまう。どんなに綺麗に片づけても、必ず残る破片がある。時間を十分かければ限りなく綺麗に掃除できるだろうが、作戦時間は限られているし、長時間のダイブは自分の危険にさらされる時間が大きいということだ。自分がキーとなつて、逆ハックを受けてしまう。

もう一つの方法が、相手に自分を容認させてしま



う事。「自分は今から貴方の頭の中に侵入しますが、それに関して目をつぶっていて欲しい」と、いわば〈お願い〉するのだ。これは高等なテクニクが必要になるが、非常に発見されづらい。相手は、「誰かを自分に侵入させたか？」という質問に、律義にNOと答えてくれるからだ。ただ、これも表面的で、記憶解析に通せば、〈嘘を付いている〉ことがたちまちに解る。

すなわち、〈破片〉然り〈嘘〉然り、相手を侵入させた、侵入した形跡が残るのだ。これをマーキングと呼ぶ。

今、女性型ボージャー〈イレブンス〉の記憶には、このマーキングが無いのだ。

眼鏡の少女は、イレブンスの記憶のマーキングを必死になって捜していたし、同時にマーキングを残さないダイブ方法の研究もしていた。

「ま、いいわ。今日はここまで。さあ起きなさい、面白いことが始まりそうよ」

少女が言うと同時に、けたたましいブザーの音が鳴り響いた。

『おい、麗美、仕事だ！ そのおもちゃと一緒に出撃しろ、コンピュータルーム208、急げ！』  
『208……ですね』

「何度目かしらね？ あの程度で厄介払いが出来ると思ってるのかしら。さ、行くわよ」

眼鏡の少女、〈マスター〉麗美は、壁にかけた大型バイザーをつかむと、颯爽と研究室を後にした。少し遅れてイレブンスがメンテナンス・デスクから起き上がり、黒いマントを羽織ると、マスターの後を追った。

### C<A>

滝のような豪雨だった。

殆ど光学カメラアイは役に立たず、センサーに頼らざるを得なかった。

アルジャーノン国旗、銀色の脳髓と電子を模したレリーフをカメラの横に刻んだ二足歩行式無人戦闘機が、編隊を組んでぬかるんだ大地を進んでいる。

脚部に組み込まれた大型ホイールもこの天候では使えずに、ゆつくりと歩いての行軍だった。

運用可能な二足歩行システムが完成したのがごく最近の事だ。数々の実験では、人間の平均的な背の高さを基準として、あまりにも大きすぎる〈システム〉は困難である事が解っている。

〈システム〉のバランスが崩れやすいのだ。

また、平均的な兵器の大きさと比較しても、あまりに巨大なものは、運用、輸送、製造、管理、それに関するコスト、あらゆる面で現実的ではないからである。

そんな兼ね合いも含めて、現在、もっとも扱いやすいとされる四メートル弱の兵器が主流となっている。

自分達の背丈のほぼ倍という、現実味を帯びた威

圧、恐怖感。無機質の不気味さ。また、モジュール交換による、都市制圧から対地、対空戦闘、支援行動といった、オールマイティーな汎用性。どれをとっても、これほど完璧で美しい兵器はなかった。

この近辺は、アルジャーノン、バードウンそして多数の国家の国境が密集する場所であり、中立の家も多数存在した。こんなところで戦闘行為におよぶなら、ましてや、不可侵の中立地帯に飛び火しようものならその責任問題は重いこと極まりない。

アルジャーノンの無人戦闘機は、バードウンを少し入ったところ、オルガシティの東300kmに位置する衛星発射施設を強襲、物理的占領する目的にあった。

ここは、衛星発射施設とは名ばかりで、衛生のほか、短距離、長距離ミサイルから、核弾頭搭載インテリジェントミサイルにいたるまでロケットを扱うものなら何でも発射するという、聞いて呆れるようなものだった。ここでも統制コンピュータは働いて

おり、そのコンピュータがアルジャーノンに（密告）したのだった。

アルジャーノン無人機隊は、まだその距離を遠く開けており、雨のおかげで見つかりにくいとはいえず、それにはかなりの時間と繊細かつ豪胆な神経を要した。

麗美とイレブンスはこの八機の無人戦闘機を任されていた。一人頭四機の無人機をコントロールする訳だが、これはあまりにも無謀だ。普通の戦闘員でさえ、一機をコントロールするのに一人から二人の人数が必要なのだ。

しかし、麗美達はそれをなんなくやってのけた。

と、いつてもイレブンスが六機をいっぺんにコントロールしているためだ。ここに、イレブンスの特技があった。人間の脳に限りなく近く、また、限りなく異なる頭脳の証だった。

麗美もまけていない、類まれなる才能を発揮して

## 11 イレブンス

二機の無人機を同時に操っていた。

麗美の才能は他にもあった。このコンピュータはM208のダイブマシンは3世代も前の超旧型だ。なのに、だ、麗美は新機種と同様の性能を発揮させていた。麗美に言わせれば、「旧型の方が素直に言うことを聞いてくれるし、多少の無茶もしてくれる」のだそうだ。

今、八機の無人機はバードウンの国境にようやく差し掛かっていた。

C<B>

大型爆撃機が雲海の遙か上空を飛んでいた。

雲海は黒く時折激しい稲光が見えた。

雲の下では激しい雨に見舞われているはずだ。

「レーダー、八つの金属反応を確認しました。」

「天候、雨天。雨雲分布、目標地域、プラス〇・

八、マイナス二・四、誤差修正許容範囲です」

「MNP発射準備良し」

大型爆撃機の中で、男が目を閉じて報告を聞いている。

爆撃機のコクピットは暗く、レーダーやモニターの明かりが顔を下から照らしている。

「……よし」

男の目が開かれる。

「MNP気象兵器投下！」

「投下します！」

雲に向かっていくつものMNP弾が投下されていく。MNP弾は雲の内部ではじけ、細かい磁鉄粉（マグネットパウダー・MNP）を撒き散らした。

MNPは互いにくっついてしまう事を抑えたいわば砂鉄のようなもので、一粒一粒が強大な磁力を帯びている。これが雲の中で対流し、雨に混じって地上に降り注ぐ。

そのため地上は磁場に覆われ、地上兵器のCPU

を狂わせたり、通信を不能にしたりする事が出来る。

また、土の上に落ちたMNPはしばらくすると有

機的に分解されてその効力を消すが、逆に考えれば、

分解されなければ永久にそこに残る。

長所と短所が表裏一体のこの兵器は、使用にあたっての入念な計画が必要だった。

おいそれと使うのでは、却って自分の首を絞めかねない。

八つの金属反応に向けて発射されたMNPは、まさに雨に混じって地上に降り注いでいた。



## 始まりを奏びるインストルメント

### intro.

数年前から緊張状態にあったアルジャーノンとバードウンの二国は、今、完全に世界から孤立している。

巨大な陸の孤島が出来上がっていた。

緊張の始まりは両国のマザーコンピューターが示唆した、自国の軍備増強の必要性だった。

どの時代、どの世界にも恐怖の均衡は存在していたのだ。

様々な兵器が開発され、情報戦略の高度化は目覚しくあった。

以前から戦争の形態変革は目にみえるように大きくなされていったが、それが加速しはじめたのも、ちようどその頃だった。

人口の大幅な減少。

得体の知れない不安の増大。

対する大幅な技術革新。

緊張の高まりと、文明の発展がまるで比例線を描くように成長していった。

ヒトは心の安らぎを捨てるかわりに、富を手に入れたといったのだ。

いや、安らぎはそれより以前に捨て去ってしまったていたかもしれない。

何かに駆り立てられるかのように、ボージャーが急増していた時期があったのも事実である。

このように、大きな時代の流れは確実に見えていた。

アルジャーノンもバードウンもお互いの力を強めていった。

この両国は周辺各国との連携も戦略の一つとしてとっており、その駆け引きによる勢力地図はまさに

生き物のように刻々と姿を変えていた。

その〈生き物〉の成長がぱたりと止んだ。

C <A B>

「……むう……」

うめきとも驚きともつかない複雑な声があちこちから漏れた。

丸く配置されたテーブルには見るからに〈お偉方〉といった人物が着席し、その中心には、全方位のマルチディスプレイが設置され、そこには〈色褪せた〉ような画像が、文字情報と共に多数表示されていた。

それは惨たんたるものだった。

壊滅した街、瓦礫の山、大地には大きなクレーターができていた。

明らかに血だまりと思われる無残な跡もある。

人間の死体も数多く映し出されている。

その殆どが民間人だ。

これを見せられて、吐き気をもよおさないほうが異常だというくらいの代物だった。

血の匂いすら匂ってきそうだった。

「わ、わかった……。もういい」

白髪の初老の男が片手で顔を覆いつつなんとか紡ぎだした言葉がそれだった。

ディスプレイの画像が消され、部屋全体の明かりが燈された。

数分か、数十分か、声も無くその部屋は静まり返っている。

その沈黙を破ったのが、先ほどの白髪の男だった。とりあえず落ち着きを取り戻している。

「この責任……どうやって取るつもりだね？」

その場に居た何十もの目が、一斉にアルジャーノンとバードウンの人間に向けられた。

「何度おっしゃられても、我が国は、無実です」

## A

パチッ……。

「痛っ……何よ？」

少女は呟くと剥ぎ取るようにバイザーを脱ぎ捨てた。

デックナボ・コンピュータルーム208。

〈マスター〉麗美・テヌートと女性型ボージャー・イレブンスがVR通信を用いて無人機を操っている最中のことだった。

「イレブンス……、セカンダリワールドからの強制排除は洒落にならないわよ」

VR通信強制切断の後遺症である偏頭痛を二機分も受けた麗美は、頭を抑えながら言った。

「いいえ、私ではありません。私も強制排除されました」

目を閉じてダイブしていたイレブンスは目を閉じたまま言った。

「切断されると同時にメッセージが刷屏込まれてきました、メインに回します」

イレブンスは閉じていた目を開いて間接的に端末を操作する。

イレブンスのメモリに刷屏込まれたメッセージが黒い画面の中に赤く浮かび上がる。

——I borrowed your performers , beauty conductor. From Pretty Destroyer :-)

「……どうやら、無人機を乗っ取られたようね……プリティ・デストロイヤー……このメッセージには何か情報が含まれてないかしら？」

「困りました……こんなことは初めてです、私自身にハッキングを受けるなんて……。今のところ害はありませんが、特殊なキーが設定されているようで、ここからメッセージを動かせないみたいです。どうしますか？ マスター」



「無人機の現在地は？」

「駄目です、国境付近が強力な磁場で覆われています。見失いました、おそらくバードダウンのMNPでしょう」

「そうか……いや、まって、MNP？」

「MNPです、非常に使い方が難しいとされている気象兵器の一種です」

「MNPだったら、ハックしても無人機は使えなくなるはず……」

「結果的にその場所に残ります」

「気になるわ……ハッキングの時間とMNP……気象衛星と、それと、バードダウンが肉眼で観察しているはずの光学カメラの情報をまわしてちょうだい」

「はい」

瞬時に、メインモニターに気象衛星からの画像が現れる。

国境付近は未だに厚い雲とノイズに覆われていた。

「光学カメラの情報は無い？」

「検索中です。セカンダリワールドの表層には無さそうです、天候が回復すれば衛星上の光学カメラから確認出来るのですが」

「天候の回復予定は？」

「低気圧が停滞気味です。もうしばらくかかりそうです」

「そう……」

麗美はゆっくりと眼鏡を直すと、何かを考え込むように深く椅子に沈んだ。

## B

「MNPはほぼ予定通りの範囲に散布されました」

「レーダーに強力なノイズが確認出来ず、成功のようですね」

国境を飛び越える寸前でMNPを散布し、バード

ウンに帰還途中の大型爆撃機の中、ペーパーメディアに気象兵器の詳細を記している男が、一段高くなったコクピットに着座している男に言うように呟いた。

情報戦略が中心になったこの時代に、ネットワークを介しての機密通信は無謀といえた。

セカンダリワールドが構築されてゆく中で、ペーパーの重要性もまた確立されていく結果となった。

「うむ……無人機の回収班は速やかに行動を開始しろ」

「了解。尚、地上の回収班とは無線連絡が不可能になります。連絡は信号弾になります」

その時、けたたましくアラートランプが明滅した。  
「何だ!？」

「監視班からの緊急連絡です!」

「繋げ!」

コクピット内に悲鳴にも似た切迫した声が響き渡った。

『どうなってるんだ!？』

「どうした!？」

『目標地点に無人機が見当たりません!』

「……馬鹿な!? 捜せ!」

『捜せと言われましても、電磁影響外からの望遠

鏡監視では限度があります!』

「なんとということだ……。わかった、こちらは回収班からの連絡を待つ、監視班はそのまま捜索を続けてくれ」

『……了解』

「……むう……」

男は、額に滲み出てきていた汗を親指で拭くと、

ノイズの混じるレーダーを見据えた。

確かにそこに無人機はある筈だった。

だがしかし、数時間後に昇った信号弾は、監視班

と同じ事を知らせていた。

アルジャーノンの無人戦闘機は忽然と姿を消していた。

## B

なものだった。

「座りたまえ」

背中から声をかけられた。有無を言わせぬ威圧感のある声でした。

サスフォアは素直に腰掛けた。ここで反抗しても無駄な事は解っていたし、何を聞かれるかも解っていた。

「何処に、居たのかな？」

肩に体温を感じた。人間の手が乗せられたのだ。

「MNPを噴霧しているとき、君は、何処に居たのかな？」

「オルガシティだ」

「何をしていた？」

肩が締め付けられる。置かれた手に力が込められている。

「君もあの爆撃機に搭乗する予定だった。なのに、データを改ざんしてまで逃げた。何故だ？ 何をしていた？」

数日後、サスフォアはオルガシティを離れ、バードウン国の首都コードにいた。  
コードにはいくつかの塔が並んでおり、塔同士が幾本もの通路で結ばれている。  
コードも一種の階層都市と言えた。  
ただ、居住区は殆どが地表面に存在し、塔には行政機関や軍などが集積されていた。  
それはいくつかに分散され、機能を分けて、不慮の事態に備えていた。

サスフォアは軍が主に集約されている二の塔にいた。  
広い真つ白な部屋の中に、一つだけ椅子が置かれている。

お世辞にも座りごこちは良いとは言えない、簡素

肩を掴む力の強さとは裏腹に、声は限りなく優しげに聞こえた。

「逃げた訳じゃない。その必要があったからだ」

「ふむ、我々は今、ある容疑をかけられていてね、君が欠けていた事が大きな問題に発展しかねないのだよ」

肩から手が離される。

コツ、コツ、という靴音が自分から遠ざかっていく。

「君は君の立場が分かっている、自由奔放に生きる事の出来る君の時代は終わったんだ。その能力を得ているときから、君はイレギュラーなんだよ」

「イレギュラーと認めていくられるなら話が早い、俺はそのとおりの行動をしたまでだ」

靴音が止まる。

「だから君は解っていないというのだ」

呆れたような、諦めたような、ため息交じりの言葉だった。

「MNPを噴霧してから数分間に、アルジャーノンの無人戦闘機が忽然と消えた。MNPは無人機を足止めする程度の些細なものだ。それがあろう事か、消えた無人機は突如中立国に現れ首都を壊滅させた！これが何を意味しているか解るかね」

「……………」

「アルジャーノン一国の責任では済まされん。君が欠けていたことも十分不安要素なのだ……」

「俺は、オルガシテイにいた。それだけだ」  
はあ。というため息が背中から聞こえる。

「君には、連邦議会に出席してもらわねばならない。我々の国運は君の発言にかかる事になる」

真つ白な部屋の出口から、男は言った。

「悪いが君にはもう少しここに居てもらわねばならない……私は君が本当の事を話してくれる事を信じているよ……。失礼する」

扉が閉まる静かな音が部屋中に響き渡る。

サスフォアの耳は、うるさすぎるほどの静寂が支

配していた。

C<A>B>

「何度おっしやられても、我が国は、無実です」  
毅然と眼鏡の少女が言い放つ。麗美・テヌートである。

「貴様ら！ 頭がおかしいのか！？ これはアルジャーノンの無人機によって引き起こされたのだぞ！ それをまだ無実と言い張るか！？」

今度は、椅子を飛ばして立ち上がった別の男が顔を真っ赤に染めて麗美へとくっつくかかった。席が離れていなければ、その場で麗美の首を絞めかねない勢이었다。

「先ほどお見せした我々の行動履歴が全てです。それ以外の事を言う必要がありますか？」  
あくまで冷静に麗美は発言する。

「信じられるものか！ データの改ざんなど貴様

らには簡単なものだろうが！ えっ！？」

「お静かに」

「な……」

その男は白髪の男に諫められて、肩を震わせながら着席した。

だが目はまだ麗美を睨んでいた。

白髪の男の目はバードウンに向けられた。

「貴国にも疑いはかかっている。貴国の使用した気象兵器MNP……、その磁場が無人機のCPU、人工知能に干渉して、攻撃目標を狂わせた……」

「その憶測は正しくありません。MNPはCPUや各種回路の活動を完全に停止させるのが目的です。全てのデータをデリートする能力は有していても、一部のデータを改ざんする細やかな能力は全くありません」

長身の男が静かに、しかし、はっきりと発言した。  
長く伸びた前髪と、引き締まった体躯は、サスフオアのそれだった。

「しかし、あれはまだ実験段階だったと聞くが？」

「マザーコンピュータの仮想空間ではほぼ完全に成功していました。それに用いた実験データは全てが仮想実験ではなく、実際に得られたものを使用しています。全ての実験を仮想空間で行っていた訳ではありません。以上の理由から、MNPは実験段階を脱しています。バードウンのマザーからもGOサインが出ています」

「だが、実際の最終実験を行った訳ではなからう……？ それで完全だと言えるのかな？」

「……」

「それにサスフォア君。君はこの作戦に参加しているように見せかけて、作戦には参加しなかった。君は何をしていた？」

サスフォアと丁度対極の席に座っていた男が手を上げた。

サスフォアに憶えのある顔だった。何故トウコー

ダがここに？ という考えが脳裏を過ぎったが、僅かばかり目を見開くに留めた。

「オルガシテイで俺と飲んだ。悪いな、俺が無理矢理呼んだのさ」

「それは事実かね？ 証拠は？」

「サスフォア、これに見覚えは？」

そういつてトウコーダは腰の銃を抜いて見せた。憶えのあるレリーフが、すぐに目に入った。

「ああ、間違い無い」

「他に証拠はないのかね？」

「無いね、飲んでいた店の名前を挙げてもいいが、我々に協力するとも思えん」

リボルバーをホルスターに収めながらトウコーダは言った。

「とにかく、我々の無実を証明するにしても、バードウンの無実を証明するにしても、どちらにせよ無人機の回収とその解析が必要になります、一時の猶予を頂けることを希望いたします」

麗美が発言する。

しばらくの沈黙の後、白髪の男が言った。

「……解った」

「議長！ 私は賛成しかねます！ いくら理由をつけようとアルジャーノン、バードウン両国の罪は明白です！ ここは両国の……」

議長と呼ばれた白髪の男は、手を挙げる事でその反論を遮った。

「そう長い猶予は与えられん、そもそも関係各国の離反は決定的だ。世界で孤立する事になる。長くはもたないぞ」

「承知しています」

「よかろう」

議長はそう言うのと、手元のパネルを操作し、マルチディスプレイに、アルジャーノン、バードウンに調査期間を与える事、それでも真相が判明しない時には両国の責任を問う事などを出力した。

「これにて、連邦議会を終了する」

議長は、会議室に響く声でそう宣言した。

議長の言うとおりに、アルジャーノン、バードウンに協力していた事で、他国から非難を受ける事を恐れた関係各国は、次第に両国から離れていった。

非常に短い期間のうちに、今までの関係が嘘のように、アルジャーノン、バードウンは世界から孤立していった。

アルジャーノンからは麗美とイレブンスが、バードウンからはサスフォアが、それぞれ調査に駆り出されたのは、連邦議会が終了してから、ものの数時間後のことだった。

## 必然のクマハント

intro.

暗黒の空間に、男の姿が浮かび上がっている。

上半身に強いライトが当てられて、その輪郭がハレーションを起こしたようにぶれている。

いや、そういうように見えるだけだ。

少なくとも女は、そんな男の後ろ姿を見ていた。

「どうして……？」

女の声が響く。

だが女の唇は動いていない。

女は、自分の頬に涙が伝わることを感じていた。

どうしてそんな感覚が感じられたのかということよりも、何故涙があふれてくるのか、何故泣いているのかというほうが疑問だった。

「ねえ……」

その声に、男が振り返った。

男はうつむいていた。

肩を震わせていた。

暗闇には、男と女の二人しかいないわけではなかった。

ぼうつという明かりが次々に灯っていく。

女ははっとなってあたりを見渡した。

九人の男が一段高い空間から自分を、いや、自分と（目の前にいる男）を見下ろしていた。

「……仕方が無かったんだ」

嗚咽に声をとぎらせながらも、はっきりと（男）は言った。

「……嫌……嫌よ！ 私、消えたくない！」

「君の意志は、過去のあの時をもって、全てが無効化されている、それは何の意味も持たんよ」

女の（心）にどこからともなく響いた。しわがれた男の声だった。

「そうとも、君はもう必要ないのだ、イレギュラ  
ー」



また別の男の声が響く。

「なぜ我々はこのような過ちを犯してしまったのだ……」

「犯した過ちは償えばよい……今その償いをするのだ」

「良いな……過ちを償うのは、お前だ」

十八の瞳が一斉に〈男〉に向けられる。

「さよなら……」

暗黒の空間が一瞬にしてホワイトアウトした。

落下していく感覚を伴いながら、女は深い眠りに落ちていった。

「私は……消えるのね……」

D < B >

サスフオアは煙草がいやに不味く感じた。

最初の二、三口で吸うのを止めてしまった。

頑丈だけが取り柄の軍用ジープが荒野を疾走し

ている。その乗り心地といったら悪いことこの上ない。こんなものに数時間も乗っていたら、首がもげてもおかしくないと思っていた。

道とは間違っても呼べない、〈行き先を示す跡〉が地平線の向こうまでずっと続いている。

がりっ……

サスフオアは危うくミッションを入れそこないそうになった。

また見覚えのある顔を見たからだ。しかもこんな荒野の真ん中で、だ。

諦めたようにサスフオアは車を停めた。

「よっ」

その顔は明らかに笑顔で、オマケに手まで振っている。

「お前……」

「そんな顔すんなよ、俺にはお前が必要なんだ。」

逃げることは無いと思うがね、どうせお前も俺が要るんだろ？」

「口説いてるようにしか聞こえん」

「その通りさ……俺はお前を愛してる……」

「お断りだ。俺には同性嗜好は無い」

「冗談が通じない野郎だな、こないだの会議で誰が助け船出してやったと思ってるんだ？」

「解った……乗れ」

トウコーダを乗せたジープは前置き無しに走り出した。

元から最悪の乗り心地であったクルマを余計乱暴に扱うものだから、それは酷いものだった。

サスフオアのささやかな抵抗だった。

「もつと丁寧に操れないのか！？ うおっ」

「うるさい、舌を噛みたくなくなったら黙っていろ」

地面に張り出た一際大きい岩を最高速度近いスピードで乗り越えると、瞬間車体が浮き上がり、何回

かバウンドして着地した。それが収まると、サスフオアはやや速度を落した。

多少気が済んだようだった。

「生きた心地がしないぜえ……」

決して座りごちの良くない座席からずり落ちるような格好で、トウコーダは呟いた。

「何故だ」

「はん？」

「何故連邦議会に出席出来た？ お前は何だ？」  
前を見据えたまま、サスフオアが尋ねる。

「何だ？ って言われてもな……赤目代表ってとこかな。ま、コネが一番大きいところだがね」

「それだけか？」

「こないだと同じ事尋ねるなよ。その質問には今は答えかねるが、YESかNOかの基準で言えば、

NO」

オルガシテイで見たあの表情を浮かべながら、トウコーダはサスフオアを見ていた。

口には微笑が浮かんでいる。

「お前がその気なら、そのうち教えてやる。教えなくても知るだろうがな」

「……」

「そう難しい顔するなよ、良い男が台無しだぜ……」

女を誘うような艶を帯びたような声を出すものだから、サスフォアは急制動をかけながら車体を360度ターンさせて滑らせた。要するに故意にスピンをさせたのだ。

「おわっ!!」

トゥコーダは情けない声を上げてジープから放り出されそうになる。

それからというもの、トゥコーダは静かなものだった。

D' < B >

そこは血の匂いが充満していた。

腐臭もそこから漂っている。

数分そこに居るだけで、正常な意識を失いそうだった。

多少は片づけられていたが、まだ死体は累々と転がっているし、未だに火の手が上がっている所もある。

連邦会議のときに投影された〈写真〉と同じ景色が広がっている。

「ひでえな……」

「階層都市の弱点だな」

何事も感じていないかのようにサスフォアは呟いた。

中立国セラの首都トランスは小規模な階層都市だった。

階層都市とはその名の通り、巨大なビルのような構造で、その階層毎に街が建設されているというものだった。

一時期の人口爆発の名残だった。人の居住する場所を、縦に伸ばしていったのだ。

その時代、平地に住んでいること自体がブルジョアの証だった。

対災害対策も十分過ぎるほどとられていたが、第一階層が崩れば、なし崩しに街は崩壊する危険性があった。

現在にいたるまでの数々の戦争においては、倫理面や、その必要性の無さが先行して、街を一つ（全市民の命を奪いながら）破壊するといったことは殆ど無かった。

だが、（それ）をたった八機の無人戦闘機が実践していった。

今は、その無人戦闘機を捜すことが最優先だった。街の破壊具合を見て、サスフォアは街の西側から順に破壊されたものと推定した。

ならば、街を破壊してゆきながら回り込むように東へ抜けたものと考えてよかった。

果たして、サスフォアの推測は的中した。

トランスの東、やや離れた場所にそれはいた。

見たところ、アルジャーノンの調査チームはまだ到着していないようだった。

サスフォアは肩に装備したレコーダーを回した。

八機の無人機のうち、ゆうに五機は既に行動不能に陥っているようだった。

殆ど跡形も無い、と言った方がいいかもしれない。ここに存在するのが不思議な代物だ。

考えにくいだが、比較的損害の少ない三機が運んできた可能性もある。

何故そんなことをするのか理解に苦しむが、ここに来た者へのアピールとするなら、それは効果的だった。

まず面影すら失われた五機を調べてみるが、メモリやマザーボード関連は解析不能なほど焼けてしまっていた。無傷なところに残っているチップを回収

しても、この状態では恐らく無駄だろう。

それでも出来るだけ詳細な記録を残そうと、あらゆる残骸と言った方が適切かもしれない〈部品〉をレコーダーに記録させていった。

一通り記録を済ませると、サスフオアは残りの三機を眺めた。とりあえず動くことは出来そうである。カメラアイも故障はなさそうだし、四肢はしっかりしている。

何故MNPを食らって動いているのかという疑問はひとまず置いておき、三機のうち一機のマザーボードを確かめようと背中に回った。

無人機の中核は、通常背中へのハッチを開けた、その更に奥の方に配置されている。

「おい……」

不意にトゥコーダから声をかけられた。

トゥコーダは彼の目の前の無人機を指差している。その無人機を見たサスフオアは一瞬何があるのか解らなかった。

ミサイルポッドと背部ハッチの間に何かがうずくまっていた。

サスフオアは無人機によじ登って、それを確認した。

良く見るとそれは少年だった。少年は寝ているように動かなかった。

少年には不釣り合いなほど巨大なバイザーを着用していた。

サスフオアが慎重にバイザーを脱がすと、少年の首はカクリと力無くたれた。首筋に手を当ててみたが、脈を診る前にその体温の冷たさで少年が死んでいることが解った。視覚的にも肌の色が変色していた。

「死んでいる。だが妙だな……持ち帰って解剖する」

少年の半開きになった目を覗き込んだとき、サスフオアの顔色が変わった。

少年の瞳は充血していたが、そこに血の赤色はな

かった。瞳は銀色に染まっていた。血中に銀色の何かが溶け出していったのだ。その銀色の正体をサスフオアは知っていた。

資料写真では嫌というほど目の当たりにしていたが、実際に見たのは始めてだった。

「シナプス……ナノ……」

## D"<B'A>

グラリと足元が揺らいだ。

無人機の機能は停止している。ジャイロも働いていないワケで、自分の体重でバランスが崩れたのかと思っただけでそうではなかった。

いつのまにか起動を示す頭部LEDが点燈している。

無人戦闘機が、何かを求めるように目覚め始めた。「何！？」

無人機のカメラアイがこちらを向いている。ピン

トを合わせるように、カメラの中のレンズが蠢いている。

サスフオアは蛇に睨まれた蛙のように動けなかった。

汗が額を伝う。無限に長い時間が過ぎていく感覚をたっふりと味わった。

それを現実世界に帰したのは、トウコーダの声だった。

「飛び降りろ！！」

その声に反射的に身を翻すサスフオア。

その瞬間のことだった。少年を背に抱えた無人機は、大きく腕を一振りすると、肩に装備されたミサイルポッドを叩き潰した。同時に、ポッド内に残っていたミサイルが爆発する。

無人機はひとたまりもなく自爆した。

少年の亡骸も爆発に巻き込まれ四散した。残りの二機がサスフオア達に迫る。

「メモリは残せ！ その他は破壊してもかまわ

ん!!!」

サスフオアは腰のリコイル式光子銃を抜くと、無人機の足に狙いを定めた。

その時だ、ドンっという音と同時に、目の前の無人機の左足が爆発するようにもげた。

サスフオアが銃を抜くより早く、トゥコーダは銀のリボルバーを発砲していた。

恐ろしい破壊力だった。

「撃つてみるかい？」

無人機を見据えながらトゥコーダが面白そうに尋ねた。

「シロウトの使う銃じゃねえがな、確実に肩を外す」

「腕自体が吹き飛ばされそうだ」

「そうさ、無反動のレイガンを使ってる奴には触らせたくないね、お前さんのもリコイルか？」

「そうだ、リコイル式光子銃。弾丸に光エネルギーを閉じ込めて発射する。命中したときにそれが爆

発的に開放される。無反動銃ばかり使っていると体かなまる、それに、戦場で燃えない」

左足を失った無人機は、手について体勢を整えると、胸部に装備されたレーザーを発射してきた。

軽やかにそれを躲す二人。足元が焼けこげている。トゥコーダがニヤリと笑った。

「君の戦場はセカンドリワールドではなかったのかい？」

「ふふ、色々あるのさ」

「いろいろねえ……」

サスフオアの腕も見事だった。

片足を失った無人機の両腕と頭部を、ぴたり三発で打ち抜いた。

その無人機はグラリと地面に倒れ、残った足を痙攣させると、活動を停止させた。

だが、その一機に気を取られすぎていた。残りの一機が、サスフオアの背後に、いた。

「サスフオア!!!」

サスフオアの頭上に覆い被さるように無人機が迫っている。

サスフオアの目の前で、胸部レーザーがエネルギー充填完了を示す兆候を見せていた。

(撃たれる……)

この至近距離だ、撃たれば確実に体の半分は溶けて無くなることは確実だった。

そして、レーザーは放たれる。

しかし、サスフオアは死ななかつた。

サスフオアの目の前に何かがある。前半分が焼けただれた物体が、顔をかばうようにして立っていた。

サスフオアとほぼ同じ背の人型の物体だった。

その物体は舞うように無人機に取り付くと、力任せに無人機の腕を引きぬいた。

バランスも兼用している腕をなくした無人機は、ふらふらと歩きながら自分に取り付いた物体を引き剥がそうとしていた。突き出た岩に自らを体当たりさせて、〈異物〉をなんとか取り除こうと、無人機

は岩に突進した。

無人機が岩にブチあたる寸前、その物体はふわりと無人機から離れ、地面に着地した。

その直後、轟音とともに岩に無人機が体当たりをかました。

ダメージを食らったのは岩の方だった。無人機には僅かな凹みが出来ただけだ。

間髪入れずに、その物体は無人機に体当たりを食らわせた。

なんと、無人機の方がバランスを崩して倒れ込んだ。倒れた、というよりも飛ばされた、と言ったほうが正しい。

無人機は腕を失っている。起き上がることは不可能に近い。それでもなお起き上がろうとする無人機の姿は、ある意味滑稽に見えた。

最後にその物体が動力を破壊すると、多少の間足を痙攣させたが、残留エネルギーが無くなると、それもすぐに止んだ。



その物体がゆつくりとこちらに向つてきている。身体は焼けこげて、機械部分を露出させているが、顔は美しい人間女性のそのものだった。

## D™ &lt;ATB&gt;

「残つた無人機は2体……まあ、こんなもんかしらね」

麗美は値踏みするような目でサスフォアとトゥコーダを見た。

「あなた、バードウンの人間ではないみたいね、こんな所で何をしてたの？」

トゥコーダと麗美では背の高さがかなり違う。麗美は、トゥコーダを見上げる格好になる。しかし、麗美の高圧的ともいえるが、毅然とした態度は、彼女を大きく見せていた。

「愛した男と一緒に居ただけさ、お嬢ちゃん」

トゥコーダを見ていた麗美の瞳がサスフォアに向けられる。『この男の言うことは本当なの？』という無言の詰問だった。

「さあな、アイツが勝手に思つてただけだ。アイツがここに居るのは、俺が必要としていた。それだけだ」

「そう」

しばらく麗美はサスフォアを見つめていたが、不意に肩を竦めてみせた。『とりあえず解つたことにしておくわ』ということだ。

「イレブンス。体の調子はどう？」

女性型ボージャー・イレブンス。

サスフォアをかばい、なおかつ離れ業で無人機との戦いを繰り広げたその物体の名称であった。

今、麗美は小型端末を用いて、イレブンスのスキヤニングを行っていた。

「メモリ、記憶回路に異常はありません。ただ、あちこちの有機回路が溶解しています、メンテナンス

スが必要ですね、いつ動けなくなってもおかしくない状況です」

「そうね。でもこれはレーザーの直撃を受けたわけじゃないわね。イレブンス、シールドの出力上げすぎよ、これはあなたのミス」

「はい」

「でも困ったわね……こんな所じゃメンテは無理……か」

一方、サスフォア達は、無人機の解体をしていた。メモリやマザーボードを初めとして、無人機の頭脳といえる部分を〈摘出〉していた。

これを解析することによって、MNPは効果があったのか、何故この暴走ともいえる行動を起こしたのか等、様々な情報を引き出すことが出来る。

このマザーボードは有機部品を数多く使うことで、言わば、小さな情報による〈体系〉が確立されていた。つまり極小のセカンダリワールドが形成されて

いるのだ。

そのワールドを覗いて、外部からの影響による〈体系〉の乱れや変化を見るのだ。

サスフォアによって頭脳を摘出された無人機は、もはや、ただの金属と特殊樹脂のかたまりでしかない。

二機分のボードを抱えて戻ってきたサスフォアは麗美の端末を覗き込んだ。

「酷いな。よくこれで動いてるもんだ」

「あたしも不思議」

「あいにく、部品も道具も無いが。ま、あったとしても俺に、修理は、できん」

「……嘘、出来ないんじゃないやなくて、やりたくないんでしょ？」

「さてね？」

無人機のマザーボードの一機分をサスフォアは麗美に投げてよこした。

「それはお前達の分だ、もってきな」

「ちよつと、話があるの？」

「断る」

「聞きなさいよ、悪い話じゃないわ。……あなた、イレブンスを恐れているの……？」

意外と綺麗な瞳がサスフオアを見ている。

そんな中で、左目の光沢の質が違うのが気になった。

その視線に感づいたのか、麗美は左目をかばうように眼鏡を直した。

「色々調べさせてもらったわ。悪いけど。あなたのこと」

「……………」

「バードウン国、コンプティア所属。セカンダリワールドではかなり活躍……無茶ともいうけど、してみた いね。なぜ生きてるか不思議なくらいよ。イレブンスがいなければ、あたしだってやりたくないような本当に無茶な事も。あなた、自殺願望があるんじゃないの？」

「余計なお世話だ。出来るからやったことだ。死にたいと思つたらもつと確実な方法で死ぬさ」

「いいわ。とにかくあなたは、セカンダリワールドでも人離れた能力をもつてる。それ故に、軍部からはイレギュラーとして扱われていた。当然よね、手持ちのコマが勝手に動いたらゲームにならないわ」

パチツと麗美は端末のキーを叩く。

「軍の一員として普通に生活していたあなたを変えてしまった理由を言つてあげましょうか？」

「言うな……」

「サステイン……」

「その名前を言うなといつている！」

圧倒的な殺気を体中からたてながら、麗美を見下ろしていた。

普通の人間なら逃げ出してしまいたいほどの雰囲気があるそこにはあつた。

トゥコーダは静かに成り行きを見ている。

「……………」

麗美の瞳はサスフォアの瞳を捉えて動かない。不思議な気分だった。無言の交信がそこには存在していた。

「もう、俺は元には戻れん」

麗美に背中を向けると、サスフォアはイレブンスに近づいていった。

「話、聞いてくれるわよね？」

サスフォアの背中に向って麗美は話しかけた。

サスフォアは背を向けたまま片手を上げ、ひらひらと振った。

諦めにも似たけだる気な動作だったが、その背中には何かの意志ともいえるものが現れていた。

D<sup>III</sup> <AB>

麗美の話をかいつまんで言うと、『これ以上状況が悪化することはないのだから、お互い協力して真

相を捜しましょう』ということだった。

世界からアルジャーノン、バードウンが孤立してもなお、世界の目はこの二国の動向に興味を示していた。

いや、興味を示していたというより、一貫した感情を持って見ていたというほうが正しい。

世界は、この二国の無罪が証明されることなど望んではいなかったし、そんな事が出来るとも思っていなかった。結果的に、すぐにでも連邦裁判によって裁かれ、一気に国力を失うはずだ、そうなれば我が国が勢力を伸ばす好機である。

どんな国も多少の差はあれ、同じようなことを考えていた。

サスフォアはとりあえず、手慣れた様子でイレブンスの〈手当て〉をした。

応急手当とも言えるものだったが、それでも現状のイレブンスにとっては十分すぎるほどのものだった。

た。

麗美は少し感心したような目で、その手当てを見  
ていた。

イレブンスは、損傷が大きく、無駄に流出するエ  
ネルギーを節約するために、〈睡眠〉に入っていた。  
だが、いつものとおり、〈ドリーム〉を介して麗  
美の端末にアクセスしてきている。

ドリームというのはアルジャーノンのマザーコン  
ピュータ（ユナイズ88）の内部アドレスの一部の  
名称である。

イレブンスのような、記憶を有機メモリで行うボ  
ージャーは、メモリのフローが起る前に、優先度  
の低い記憶をそこへ移すのである。

『マスター、よろしいですか？』

端末から、女の声が出た。イレブンスのものだっ  
た。

一瞬、サスフォアはその声に誰かを思い出しそう  
になったが、おぼろげに浮かぶだけで記憶の表面に

は現れなかった。

「どうしたの？」

『無人機の事で、不可解なことがあったんです。

それをお話したくて』

「不可解なこと？」

『ええ。無人機が乗っ取られてから、セカンダリ  
ワールド内でも、無人機のマークは行方不明にな  
っていました。それが、私が聞っている時に、アク  
セスがあったんです……無人機から……いえ、彼か  
ら、です』

麗美は考え込むように眼鏡を押え込んだ。

「プリティ……デストロイヤー……」

「……お前達の行動履歴に見たあれか」

連邦議会するとき、アルジャーノン側が示した〈証  
拠〉である無人機の行動履歴だ。

最後に示されていた謎の人物から送られて来たメ  
ッセージ。

そのメッセージの最後に、〈From Pretty

Destroyer」を記されていったのだ。

しかもその後ろには（…）という、スマイルマークまで付記されている。

「そうよ、彼に無人機は乗っ取られたの」

「……イレブンスが闘っている時にアクセスがあった……となれば、あの子供じゃねえな……」

トウコーダが、地面に突っ伏して動かない無人機を眺めて呟いた。

「子供？」

「まだ見せていなかったな。俺達がここに来たときに、稼働可能と思われる無人機は三機あった。そのうち一機の背中に少年の死体が乗っていたんだ。死因は不明だが、血中にシナプス・ナノが溶け出していた」

サスフオアは記録した情報を自分の持つ端末に表示させた。

安らかな少年の死に顔が端末に浮かんでいる。

「シナプス・ナノ……。その少年の死体は？」

「無人機が自爆したときに吹き飛んだ」

「……イレブンス、そのアクセスは何だった？」

思い出したようにそう麗美が尋ねると同時くらいに、イレブンスは端末の画面に赤い文字を表示させた。

—Concert is completion. Please give me your applause.

「コンサートは完璧だ。拍手をくれ……舐めた野郎だ」

「キーは？」

『設定されていませんでした』

「逆ハックは？ かけた？」

『もちろん。でもそれが、変なんです。そのアクセスが（拒否）されるんです。今も、拒否され続けています』

「馬鹿な……？」

思わずトゥコーダの口からそんな言葉が漏れた。無理も無い、無人機の機能は既に停止している。無人機の頭脳も既に摘出したし、それを操っていたと思われる少年は既に死亡し、亡骸も爆発で四散した。

〈拒否〉する事が出来る要素が全く無いのだ。

「確かなの？ そのアドレスは」

『間違いありません』

「そう……」

今、麗美とサスフオアは同じ事を頭に思い浮かべていた。

それはセカンダリワールドに出現すると言われる〈ゴースト〉の存在である。

ゴースト。

それはその名の通り、セカンダリワールドに出没する幽霊の事だ。

セカンダリワールドの支配者と噂される存在だっ

た。神通力を具えたように、あらゆる情報を支配できるその〈何か〉は、滅多に姿を見せない事もあって、いつしかそれはゴーストと呼ばれるようになった。

過去において何回も調査されたが、結局解らずじまいで現在に至っていた。

当たり前である、その調査ですらもするりと躲せるのだ。どんな技術を持った者でさえも、セカンダリワールドではゴーストを超越した存在になどなれるはずもなかった。

だが、今となつてはその言葉は知つていても、誰も信じるものなどいない。

今その呼称が残っているとすれば、サスフオアや麗美といったセカンダリワールドで活躍、活躍する人物を、皮肉を込めて〈ゴースト〉と呼んだり、〈ゴースト〉と名乗る私設クラッキング集団が存在するくらいだった。

とにかく、麗美達はその可能性を求めて調査を始

40  
めることにした。

そんな〈迷信〉を信じるなどあまりにも道化じみ  
ているが、現にゴーストは二度、イレブンスに接触  
してきているのだ。

イレブンスに〈ゴースト〉からの、三度目の接触  
があったのは、このすぐ数日後のことだった。





動物園のパンサー

B

「あいつが、死んじまったよお……」

サスフオアは自嘲気味にそう呟いたが、その言葉の最後は嗚咽にかき消された。

女はその時初めてサスフオアの涙を見た。

薄暗い酒場のカウンターに二人はいた。

狭い酒場だった。席はカウンターにしかなく、五人も客が入れば満席になってしまうほどだ。

入り口は開け放されていたが、店の前の通りには人影は殆ど無かった。

その店は、入り組んだ小路の奥の方にあり、時々入ってくる客といえ、餌を漁りに来た猫ぐらいのものだった。

ほとんど開店休業のその店にはしかし、決まって

来る客がいた。

女は、そんな小さな店のマスターであり、女は、その客のために店を開いているようなものだった。

その客はいつも二人組で現れた。

一人は引き締まった筋肉を持った長身の男だった。サスフオアである。

漆黒の髪と、深い青色のコンバットギアに身を包んでいた為に、暗いこの酒場に入ると影にしか見えなかった。いつも厳しい目つきをしていたが、女の前では限りなく優しい光をたたえていた。

もう一人は、サスフオアが小さく見えるほどの巨漢だった。

美しい髪の毛を腰まで垂らし、いつもローブともいえる古風なマントを羽織っていた。

この人物も闇に紛れると影そのものだった。

しかし、この人物が普通ではないところいくつかあった。

それは顔である。

この人物の顔は紛れも無く童そのものであった。ワニのように大きく開く口。その中には何でも噛み砕きそうな巨大な牙が何本も生えていた。

いかにも恐ろしげな様相を呈していたが、髪の毛と同じ金色の瞳は満面に温和さをたたえていた。

少なくとも女にはそう見えた。

この〈童〉が何者かといえ、それは変わり者のボージャーのそれだった。

ボージャーの中にはこういう変わり者が、決して多くはなかったが、いた。

このボージャーはベースが人間ではない。一から人間によって作り出された〈ロボット〉だった。

顔の造形を、人型でなく、ファンタジーに登場するような竜やエルフに変えてしまうのだ。

生身の人間の整形ではそうはいかない。

とにかく彼らは、有機回路の概念が発見され、人間の脳の働きの究明と、精神科学、進化論の飛躍的進歩の副産物だった。

これらは、マザーコンピュータのベースとなる技術が創り上げたものでもあった。

この〈ロボット〉の思考は限りなく人間に近かった。生まれた国によって考え方も様々だし、趣味といえるものも存在した。ある者はファンタジーやミステリーなどの小説を好んで読み、ある者クラシックを好んで聞いた。

とにかく、サスフォアも女もこの〈童〉を愛していた。

友人と言う言葉で済ませてしまうのでは、あまりにも陳腐であった。

サスフォアの一番頼れるパートナーだった。

そんな相棒は、もう、この酒場に来ることは無かった。

来ることは出来なかった。

何故なら、彼は〈死んで〉しまったのだから……。

その相棒の名を、サスフオアは嗚咽の混じった声で何度も何度も呟いた。

女は、そんなサスフオアの背中を、ただ優しく撫でてあげる事しか出来なかった。

intro.

「ターゲットと上手く接触できたみたいだね」

暗い部屋のモニターに若い男が映っている。

男の画像は全体的に青白く変色してしまっている。それもそのはずである、ここにある端末は、どれも旧世代のものばかりだ。だれも好んで使うようには思えない代物である。そのモニターはすでに画面が焼けてしまっていた。

だが、麗美のように、そんな旧型端末を好んで使う男がいた。

その男がモニターに向かって話かける。

「ああ、これであの計画もようやく再開したと言うことか……」

「そうだね。この氷のような冷たい世界も、もうそろそろ消える……」

モニターの男は遠い目をしながら呟いた。目の前にあると思われるカメラの向こうに何かの思いを馳せているようだった。

しばらくの沈黙の後、旧型端末の前で、男はモニターに向かって尋ねた。

「……あなたは、怖くはないのか？」

その声には多少躊躇いが浮かんでいた。

「自分が消えてしまうことか……怖いよ、とてもね……」

ゆっくりと、モニターの男は答える。

「でもね、僕は生き過ぎたんだ。とても長い時間。人が生まれて、死んで。また生まれて……。そんな長い時間、僕は生きてきた。たぶんこれからも、僕でない僕だったのなら、生き続けたんだろう」

「……」

モニターの男は、更に話し続けた。

「同時に、ぼくはずっと前に死んだ。今も、僕は僕として存在しない。ならば、消えなければならぬのは当然のことだと思う。でも、彼らはそれが解らない」

「彼らは、叶うことの無い夢を見ているんだろうよ。あの時から、ずっと」

「僕には悪夢だよ……あの時彼女を救えたのが唯一の、現実」

「安心しろって、彼女は元気さ」

難しい顔をしていたモニターの男が、その言葉に優しい笑顔を見せた。

「だが、彼女も、消えなきゃならない運命なのか……?」

モニターを見つめながら男は言った。

すると、笑顔だったモニターの男は少し寂しそうに顔をして、言った。

「結果的にそうなるかもしれない……。でも、彼女はもう僕たちの身体を離れている。彼女の命は、あの男と、……イブ次第だよ」

C<A>B>

丸い部屋の真ん中に、手術台のようなデスクが置かれている。

デスクの上に置かれている緑色の箱は、アルジャーノンの無人戦闘機のマザーボード、いわば頭脳だ。

そのボードには様々なコネクタが接続され、解析端末に繋がっている。

解析端末の前には、モニターに表示された結果を見て言葉を失っている男女がいた。

二人とも険しい表情をしていた。

何故なら、今日の当たりになっている解析結果が、常軌を逸しているものだったからだ。

無人機の頭脳は、〈進化〉していた。

この頭脳は無論、変化しないものではない。行動を学習する能力を持ち、だんだんとその使用者に合った頭脳へと変化してゆく。それは個性ともいえたが、変化は緩やかなものだ。

しかし今、目の当たりにしている頭脳は学習とと言えるような変化ではなかった。

この変化を形容するには「進化」という言葉を使うほかない。

しかも、その「進化」は人為的に、しかもごく短時間で為されたものである形跡があった。

ボードに搭載されている有機回路はほぼ全てが活動しているのではなく、人間の脳のように常に七割の活動領域を保って機能するようになっていた。

そのローテーションの中で、極小のセカンダリワールドを形成し、情報の体系を作り上げているのである。

しかし、MNPを食らうと、有機回路の情報体形が無作為に乱され、活動が止められてしまう。

実際、活動を止められた形跡は存在している。

だが、それを補うように有機回路の情報体形は修復されていたのだ。しかも、高度に。

「あの少年の死亡推定時刻はいつぐらいだと思う？」

「記録からは解らないわ……でも、まさか……？」

「MNPの影響を受けて活動を停止させた形跡は残っている。一度は確実に機能したんだ、その時点で外部からの通信によって頭脳の進化を促したとは考えられない。だとすれば、MNPが散布された直後の、その僅かな時間を利用して無人機に直接接触したんだ」

サスフオアはモニタに投影されている少年の亡骸を見て言った。

「そうか……それでセカンダリワールド内の無人機を示すマーカーが行方不明になっていたんだ……」

傍の端末に、行動履歴を表示させている。

それを覗き込む麗美の顔がモニタにうつすらと反射している。

「少年は死んでもなおゴーストとして存在している……」

「通常はありえない。なぜそんな芸当が出来るのか……」

「それに、無人機がなぜトランスを襲ったのか、これもまだ謎よ」

記録されている無人機の姿を再生させながら、麗美は呟いた。

突然覚醒する無人機、イレブンスの格闘する様子などが次々と映し出されている。

銀のリボルバーを操るトゥコーダを目にして、麗美はサスフオアに尋ねた。

「良い腕ね……でもなぜバードダウンの人間ではない彼が？」

「さあな、俺を利用したいみたいだが、何もまだ

話してはくれない……」

「なぜ、問いたださない？」  
「質問攻めか？ まあいい」

椅子の背もたれに寄りかかって、サスフオアは瞳を閉じた。

そのサスフオアの顔を、麗美はずっと見詰めていた。

解析作業による疲れのためか、若干やつれてみえたが、その顔は涼しげな表情をたたえていた。

疲れを隠しているというよりも、その疲れが心地よいようだった。

そんなサスフオアが目を閉じたまま言う。  
「いいのさ、俺はいまこの状況を楽しんでいる。

それを演出する一つの要素だ、あの男は。それに、あの男が居る事で不都合を感じたことは何も無い。

それが理由だ。いけないか？」  
「いけないか……って」

「ふん、バードダウンもアルジャーノンも世界から

孤立している。だが世界がどう転ぼうと俺には関係ない、俺の命はあのとときとつくに絶えている」

「……………」

「何でそれでも生きているんだろ？ な、俺も不思議だぜ」

くつくつく……とやや不気味に聞こえる自嘲の笑いに、サスフォアは肩を震わせた。

「俺も質問だ、なんでお前は駆り出された？」

「私のことを調べなかつたの？ あなたなら個人情報を引き出すのはお安い御用でしょう？」

「他人の事に興味はない。個人情報を垣間見てもしむのは、そこらのイタズラ坊主どもに任せておけばいい。まあ、お前のところまで辿り着けるとは思わないがな」

椅子にもたれたまま、サスフォアは麗美を見た。

あどけない顔つきに、大きな眼鏡をしている。きつと、眼鏡を外したらとても可愛いだろうがしかし、その異質感がサスフォアには可愛らしく思えた。

「お前はセカンダリワールドのほうか居心地が良いと思うか？」

唐突にサスフォアが尋ねる。

「え？ ……そうね……。好きなのはプライマリよ。セカンダリはあくまで利用してるだけ。仕事と研究以外でセカンダリに入り浸ることはないわね。でもプライマリ関連の仕事のほうがはかどるのは確かかしら」

「そうか……」

「……………」

麗美は怪訝な顔つきになってサスフォアの顔を覗き込んでいる。

突然サスフォアは笑い出した。豪快な笑いだった。不快な感じはなかつたが、その真意が図れずに、麗美はますます怪訝な表情になる。

笑いが一段落するとサスフォアは言った。

「ふふ、俺もさ、お嬢さん」

サスフォアは立ち上がって体を伸ばすと、軽く運



動を始め、しばらく座りっぱなしで固まっていた身体をほぐした。そして、天井を眺めながらうつすらと笑って言った。

「俺は、セカンダリワールドは好きじゃない。出来ることなら関わりたくない。だから、ダイブしている時間をなるべく短縮しようとした。そしたら見る、こんなになっちまった。一番関わりたくない事に、もつとも長けちまってる……」

しばらく無言の時間が過ぎてゆく。周りの端末から発せられるノイズが、静かに耳に痛い。

「それはともかく、だ」

ノイズを振り払うようにサスフォアが声をかける。

「このデータは、どう処理する？」

サスフォアは端末をコツコツと叩いて、麗美に意見を促した。

「どう……って？ これだけでも、私たちの仕事ではない事を証明することは出来るわ」

「もつと深い謎さ……解きたくないか？」

「あなた……セカンダリには関わりたくないんじゃないかって？」

「まあな」

「いいわ。興味のひかれるデータが揃ってるし、

あたしはこのまま終わらせる気は無いし」

「決まりだ」

サスフォアは麗美に近づくと、肩に手を乗せて麗美の身体を引き寄せる。

耳の側に口を持っていくと顔を前に向けたままそつと呟いた。

「必要最小限の情報公開に留めて、余計なことは

一切もらずな、いいな」

「わかったわ」

「それと……」

「？」

「綺麗な良い髪だ、良い香りがする」

「何？ いきなり。口説いてるつもり？」

サスフオアは麗美の髪の毛を弄んでいる。

一方麗美は、口では言うものの、それほど嫌がっているわけではないようだ。そのままにさせている。

「でも、なぜトランスは破壊されたのかしら

……」

麗美は眼鏡を抑えながら声を出して自問した。

「ゴーストが何か語ってくれるといいのだがな。

これは、イレブンスに任せるしかなかるう」

「そうね……」

二人は言うと、ガラスを隔てて手術室のような部屋の、メンテナンス・デスクに横たわって睡眠中のイレブンスを見やった。

イレブンスは珍しく端末を会して話し掛けてこなかったが、この時イレブンスにはゴーストが三度目の接触をして来ていた。

二人はまだこの事に気付いていなかった。

#### 四

「こんばんわ……フォルス……イレブンス」

子供の声が頭に響く。聞いたことの無い少年の声だ。

「起きてくれないかな……寝坊はしかられるぞ」

「……ん……」

イレブンスはその声に目を醒ます。と言っても、まだ実際の覚醒はしていない。同時にイレブンスは何か違和感を覚えた。無理も無い、ここはイレブンスのもう一つの頭脳ともいえるドリームの内部だった。ドリームの内部といえば、それはマザーコンピュータの内部であると言うことだ。

となると、今この少年は、マザーコンピュータへのハッキングをやすやすとやってのけたことになる。マザーコンピュータ自身へのハッキングの難しさは並みではない。

例えていうなら、人間の脳髓に当の人間が気付かぬうちに電極をさし込むようなものだ。

しかし、イレブンスに度々接触してきたゴーストの仕業ならば納得がいった。

イレブンスはドリームでの記憶の整理を一旦休止すると、初めて意識をその少年に向けた。

「……良く入ってこられましたね、ここまで」

「僕はゴーストみたいなものだからね、お安い御用さ。こここのマザーに頼んだらすぐ扉を開けてくれた」

にこりと少年が笑う。その少年は、紛れも無くトランスでみた死体のそれだった。

「人は死んだらお化けになるっていうのは本当だったんだね、足はあるみたいだけど、これは僕の意志だからね、想像力さえ働かせればそういうお化けにもなれそうだ。ここは、想像力が力になる、子供の頭脳はその点で強いつて聞いたよ」

その少年を見て、イレブンスは一つの確証を持つて尋ねてみる。

「……プリティィ・デストロイヤー。あなたなの

ね」

「そうだよ、実際に会うのは始めてだね」  
あつきり答える少年にイレブンスは多少拍子抜けしてしまふ。

「そこにあるのは、本当にあなたが生前に持っていた人格なの？」

「知りたい？」

少年は意地悪そうな笑顔を浮かべてイレブンスの意識に近づいてきた。

「教えてあげない！」

少年はそのいたずらな笑顔のまま言った。

「本当はもっと早くに会いに来たかったんだけど、あの女が邪魔でさ、一人になるときを待ってんだ」

「あの女……マスターの事ね」

「そうさ、僕たちは脅かされてるんだ、あの女の存在に」

真面目な顔つきで、少年は言う。



も不思議だった。不思議な香りさえ再生された。

白く眩しい光が目の前にある、その中に人の影があった。良く見えなかったが、こちらを向いて微笑んだ気がした。

何もかもが心地よかった。

次の瞬間、ふっと光が止んだ。

イレブンスの意識は、少し前と同じように、少年を捉えていた。だが、先ほどと違うのは、少年が腕を引き千切られた格好でうずくまっていた事だ。血を垂らしながら恨めしそうな目でイレブンスを見ている。

「……こんな……どうして……！」

「……何が、あったの……！」

イレブンスは自分が何をしたか全く覚えていない。有機回路を捜してもそれは見つからなかった。

「くそう！ あの男め！」

もはや繋がる腕の無くなった肩を抑えながら少年が立ち上がった。

「邪魔が入った……次だ！ 次は必ず……！」

そう言い残して漆黒の空間に少年の姿が消えた。

「僕は君だ……君以上の力を持っている！ だが僕は君のかわりにみんなに認められた！！ みんなが僕を必要としている！ ……僕の居場所には君は必要無いんだ！ 君は入ってくるな！ ……次こそ君に勝つ。勝って、自分の居場所をまもる！ フォルス・イレブンス！」

そういう少年の意識がイレブンスに滑り込んでくる。

イレブンスはその言葉を理解できない。

少年は自分の代わりであると言った……、それに何故自分を偽者と呼ぶのか……。

その言葉を理解するためには、イレブンスは消された記憶を呼び覚ます必要があった。

しかし、そのゼロ領域の記憶は、固く閉ざされたままであった。

## 鳴動のシンパティ

## intro.

〈それ〉が最初に発明されたのは、今から三十年ほど前になる。

VRを併用した疑似ネット世界がセカンダリワールドと呼ばれ始めたのが、ちょうどその頃であった。パラレルとも呼ばれたセカンダリワールドの急速な発展は、プライマリワールド（第一の世界、すなわち現実世界）にも多大な影響を及ぼした。

〈パラレル〉の名にふさわしく、セカンダリワールドは常にプライマリワールドと平行に存在し、切り放すことの出来ないほどに成長していった。

だが、人間はそれについてゆくことが出来なかった。

人間の脳は、通常三割しか働いておらず、七割は

活動を停止させている。

いままで数々の学者は、その未活動の七割の領域の活用方法を見出そうとしてきた。いわゆる、百パーセントの脳活動、〈脳内革命〉を目指したのだ。

しかし、それは失敗に終わった。

脳の七割が活動をしていないのは、その必要があつてのことと、この未活動領域は、この状態で絶対のバランスを保っていた。このバランスを崩すことは、人間の死を意味していた。

セカンダリワールドの出現、拡大はこのバランスをたやすく崩した。

人間の目の前に、現実とはまったく異なるが、限りなく〈同じ〉世界が現れたのだ。

人間は、いやおうなくふたつの世界で共存せねばならなくなった。

それは人為的に二重人格を引き起こすようなものだった。

一つの脳に二人の自分が存在するようになったのだ。

人間の脳は進化した。進化しなければならなかった。

だが、何万年もかけて動物が進化を遂げるのとは、明らかに異なるものだった。その進化は、人間に多大なる影響を与えることとなった。

進化学の学者達は口を揃えて「予言」している。

「進化の促進は死と同義である」と。

進化とは、生命がその環境に徐々に適応していくことである。

この星の誕生から数億年の時をかけて、生命は誕生した。最初はちっぽけな単細胞生物だった。その単細胞生物はその環境に適応し、爆発的に増殖したが、彼らにとって「猛毒」である酸素の出現によってそのほとんどが死滅した。

その「猛毒」に適応した、わずかな種が、再び進化を遂げていくのだ。

すなわち、進化とは「死と再生」なのである。

その死と再生には、気の遠くなるような時間を要するのだ。

この時間を縮めることは、それは「適応」する時間をそぐという事になる。まさに、進化学者が予言するように、急激な進化は死と同義なのであった。

急激な脳の進化は、脳に死を与えた。

セカンダリワールドの出現によって脳に与えられる負荷は二次曲線を描くようにまわっていった。

それに対応するがごとく、人間の脳の未活動領域は覚醒してゆき、三対七の黄金比はからも崩れさっていった。

そのまま人間が進化してゆけば、それこそ、この世界にマッチングした新人類が現れただろう。

だが、生物の神秘的なバランスはその「脳内革命」(進化)を、あつてはならないものと認識した。

人間の脳は、三対七の黄金比をかたくなに守ろう

とした。

脳の活動領域が拡大してゆくのに併せて、活動していた脳神経は一斉にアポトーシスを起こしていったのである。

活動していた神経が自殺する事で、活動領域を減らし、三対七のバランスを守ったのだ。

それは人間に死をもたらす結果となった。

この奇怪な死。

爆発的に増えた人口は、着実に減少していった。

核兵器によるものでも、細菌兵器によるものでも、まして、世界戦争による無差別殺人などでは決してない、まったく新しい人類滅亡のシナリオだった。

その救世主として現れたのが、シナプス・ナノである。

シナプス・ナノはこのアポトーシスをおこした脳神経細胞と結合することで、脳神経の代役を果たす生体機械、ナノ・マシンであった。

ナノ・マシン、と言われてはいるが、それは限りなく生物に近いものだ。

これは、血管注射によって血中に投与され、血液の流れに乗って、脳に到達する。しかし、そのままでは脳関門を突破できないため、脳関門を開かせる物質をシナプス・ナノから放出させる。しかし、脳関門が解放されると普段は脳に入ってくるべきではない物質が脳に入り込んでしまう事になり、結果的に脳の内容物が増え、脳が内側から圧迫されてしまう。長く脳が圧迫されると脳神経は一気に死に至るため、シナプス・ナノは少量づつ、長期にわたって投与する必要がある。

しかし、救世主といわれたにも関わらず、ものの数年でシナプス・ナノは姿を消してしまう。

重大な副作用があったのだ。

シナプス・ナノは、脳内で非常に安定した分子構造をとる。



物質界では、不安定な分子が安定状態へと移行しようとするのは当然の摂理であり、例えば酸素原子三つで構成されたオゾンは、空气中に漂う塩素等の結合し易い原子に酸素を一つ与えて、より安定した状態になろうとする。

その自然の摂理が仇となった。

シナプス・ナノは健康な脳細胞とも入れ替わろうとしてしまうのだ。

シナプス・ナノが代役を果たしてくれるのは、主に大脳系の働きのみである。極端な話、大脳全てがシナプス・ナノとそっくり入れ替わってしまったも、それは脳として機能した。

しかし、小脳や脳下垂体のような、自立神経系を司る細胞は別だった。

シナプス・ナノは、こういった脳の中枢をもむしばんのだ。

結果的に、自立神経は破壊され、自立神経不全を起こし、その人間は死に至った。

シナプス・ナノは当時最盛を誇っていた大国の政府機関が主導権を握って行っていた巨大プロジェクトの一つだった。

この事件により、プロジェクトは解体され、その国は失墜し権威は地に落ちた。プロジェクトに関わった人間は全員解雇され、その後の行方は知れない。

それから二十五年の間、シナプス・ナノは、人々の目の前に出てくる事は無かった……。

C<AB>

「シナプス・ナノ……か。久しぶりに聞くな……」

連邦議会で議長と呼ばれた白髪の男が、そう呟く。暗く広い部屋にはマルチモニターが一つとそれを囲むテーブルがあるだけだ。

人は、麗美とサスフオア、それに〈議長〉の三人のみだ。

「生命活動が停止すると、分子組成が崩れて血中に溶け出す……間違いない」

〈議長〉は手を後ろに組んだまま、モニターに映し出される少年の安らかな死に顔を見つめていた。

「おそらく、この少年は故意にシナプス・ナノを自分に投与したのでしょう、腕を確認すれば注射傷の状態が解つたのですが……」

サスフオアが〈議長〉に向かって発言した。

現時点で医療機関におけるシナプス・ナノ治療は絶対に行われていない。だとすれば、どこかで手に入れ、自分で投与しなければならなかった。

この少年がどこでシナプス・ナノを手にいれたのか、それに、少年が何のためらいもなくシナプス・ナノを自分に投与できたかなど、不明な点が多すぎためか、サスフオアの発言は、歯切れが悪い。

サスフオアの発言を、麗美が引き継ぐ。

「シナプス・ナノに代替された大脳はその処理能力が大幅に増大したと聞きます。記憶力、計算力から思考力まで、ありとあらゆる能力が、です。そのため、自分が健康な脳を持つているにもかかわらず、本当の脳内革命を期待して麻薬のように使用していた例が、当時、決して少なくない数あったという記録が残っています」

「ふむ……」

二人に背を向けたまま、〈議長〉は唸った。

「少年がそうだった……と言いたいのだね」

「ハイ」

はつきりと麗美がうなづいた。

「確かに不明な点は多すぎますが、この仮定でつじつまが合う事も多いのです」

サスフオアが続けて言う。

「……思いのほか厄介な事になってきたな……」

〈議長〉の手は堅く握られている。血の気が失せて、青白く変色している事でそのことがうかがえた。

「私の父は、シナプス・ナノによる自立神経不全で死んだ……」

〈議長〉は肩を震わせた。それは、悲しみと憤りによるものだった。

「……二十五年前。あの時全てが解決したと思っていた。〈あの〉国は失墜しシナプス・ナノは完全にこの世から消え去ったのだからと、私は無理矢理自分を納得させてきたのだが……」

自嘲気味に呟かれたその言葉は、非常に弱々しく発せられた。

「いや、忘れてくれ……」

〈議長〉は振り向いて苦笑した。

「まずは、シナプス・ナノの出所を探る必要があります」

「……そうだな」

言うのと、〈議長〉は自席に着いて顔の前で指を組んだ。

上目使いで、起立しているサスフォアと麗美を見

渡す。

「良かろう。君らは無実だ、今日のところは帰って良い」

「ありがとうございます」

二人は深々と低頭する。

その二人に向かって、〈議長〉は指を組んだまま言う。

「君達には、引き続き捜査にあたってもらおう。全ての真相の解明を任せる。……言いづらいことだが……これには私怨も多少……多少か……まあいい、とにかく含まれているのだが……」

「構わないことです」

サスフォアが顔をあげて答える。

「これは駆け引きですから……」

サスフォアの口元にはうっすらと笑みが浮かんでいる。

「……ふっふっふ……」

〈議長〉は指を組んだまま肩を震わせて笑った。

「私の知りたいことは限られている、全てを報告する義務はない」

〈議長〉のこの言葉の意味することは、つまるところ、『自分と世間が納得できる一定の情報さえ与えてくれれば、君達のことには干渉しない。君達が知られたくない秘密を持つていようが、それはそのまま処理しても構わない』ということである。

「退室を許可するが、ほかに聞きたいことは無いかね？」

組んだ指を解き、〈議長〉は立ち上がって、二人に近づいてきた。

「政府は動きませんか？」

麗美が、その〈議長〉に訪ねる。

「まだ時期尚早だ、それに君達が動きづらくなるだろう？」

〈議長〉はサスフォアや麗美の瞳をながめて言った。

「感謝します、それでは……」

言うと、麗美とサスフォアは会議室を後にした。

「……似ているな……私の若かった頃に……」

〈議長〉は、誰にも聞こえないような小さな声で呟くと、壁に手をふれた。すると、壁の一部がせりあがって窓が現れた。

まぶしい陽光が〈議長〉と部屋を照らしている。

「ふふふ……逆らえぬものよ、時の流れとはな……。口惜しいものだ……」

この呟きも誰にも聞かれること無く、陽光の中に消えた。

☞

「くそう……」

片腕を失った少年は、暗闇に向かって走り続けた。「このボクが負けるなんて！ 偽物に負けるなんて……」

涙とも見える白い光が少年の瞳からほとぼしる。白い光は細かい粒となって少年の後ろに流れて消えた。

肩口からほとぼしる鮮血も光となって流れていく。目を凝らせば、その光の一粒一粒が数種類で構成された記号であることがわかるだろう。

そう、ここはセカンダリワールドの深層である。

この少年は、さきほど〈ドリーム〉内でイレブンスというボージャーの意識と戦い、そして、敗れた。セカンダリワールド内では、己が望むままの姿で存在することができ。だが、それを成すには並外れた想像力と精神力を必要とする。

そのために、一般的な目に見えた実体を模倣した姿でいることが一番〈安定〉して、制御し易いのである。

今、この少年は〈偽物〉に敗れたことで、精神的にひどく動揺していた。動揺は目に見えて現れ、

〈偽物〉にのぼした〈光の腕〉を切断されたイメージを伴っている。

痛みさえ少年には感じられた。

しかし、その痛みも時間を追うごとに、いや、セカンダリワールドの深層に入ってゆくにつれて和らぎ、切り落とされた腕が、肩から徐々に再生されはじめていた。桃色の肉芽が傷口から隆起してきている。

少年の精神が落ちついてきたのもあるが、別の要因が大きいようだ。

少年の体に、色とりどりの光がまとわりついてくる。少年はそれを心地よく感じた。その光も、目を凝らせば記号の粒であることが解ろう。

少年が〈偽物〉に向けて投じた光とは別のものだ、記号の数、形が明らかに異なっている。

ここは、〈ドリーム〉でさえ表層としてとらえられてしまう、マザーの深層だった。マザーコンピュータ

ータに使用される有機回路を流れる電子は、一般的な有機回路、また、集積回路とは完全に異なっている。

通常、集積回路に流れる電子を見た場合、それは「あるか無いか」といった二種類の、いわばスイッチのオン・オフの概念を持ったもので、それを巧みに利用して、〈それ——集積回路〉は成立している。

この理論を詳しく説明するのは、都合上割愛するが、つまりは、0と1の情報しか持つてはいない。

しかし、マザーは別だ。

マザーの有機回路は違った。

科学、物理学の心得がある者には「クオークのよなもの」と言えば察しがつくと思われるが、つまりは「あるか無いか」の二種類で判断するわけではなく、「半分存在する」とか「三分の一存在する」といった複雑な判断を基準として、高度な回路を形成していた。「半分存在する」と「半分存在していない」という概念すら、同じ判断基準ではな

かった。

話を戻そう。

少年は、七色の光を浴びつつ、その中に声を聞いた。

優しく、厳しい（九人）の父親の声だった。

自分を認めてくれた父親の声だ。

「よく帰ってきた……この失敗はお前の失態ではない……私の認識の甘さが原因だったのだよ……トウル・イレブンス……」

「そうだな。イレギュラーにあいつがついていることが明白になった……いまだにあいつはイレギュラーを守り続けている……」

「彼も、すでにイレギュラーの域に達しつつある……破棄は早めの方がいいと思うがな……」

「まあ、さて。彼の廃棄はまだ尚早じゃ……我々の根はそう堅固なものではないのだよ……まだ、まだじゃ」

「悔しいものですな……イレギュラーが我々をつなく根であるなんて……」

暗闇に響いたその声は、唐突に沈黙に変わった。

沈鬱な空気がそこに漂っている。

少年は、父親のもとに帰ってきた嬉しさも忘れて、ただ心配そうに、父親達の気配を感じとろうとしていた。

それを察してか、精神体の一つが、少年に向けられた。

「すまないね……おまえは良く働いてくれたと言うのに……さあ、おいで」

少年の目の前に、男の手が現れた。

それは固く、ごつごつしたものだだったが、少年はその暖かさが心地よかった。

少年は引き寄せられるようにその腕の中に納まり、顔を埋めた。

顔を埋めた少年の眼から、光の粒が流れ落ちた。

安心感と、悔しさからくるものだった。

すでに少年の腕は再生されていた。

「お前は大きな可能性を秘めている。アイツさえいなければお前はフォルスに勝っていたのだ……」

「……うん」

「さあ……いまはお眠り……」

そう言いながら〈父親〉は少年の背中を優しく撫でた。

このとき少年は、〈父親〉の目論見にまだ気づいていない。

〈父親〉は優しさを装いながら、心のなかでは少年の働きにほくそ笑んでいた。『さすがは禁断とさられていた子供の脳だな……』と……。







## 絆と死へ捧げる「クイーム」

## intro.

暗闇の中にぽつんと一つだけ青白い光がともっている。

その光に照らされて、その光をのぞき込む何かが闇の中にある。

「もどかしく思うよ……」

モニターの中から若い男が話しかける。

モニター自体はもう何年も前に廃棄されたような古ぼけた物で、画面に映像が映っているのが不思議なくらいである。

もちろん、モニターには新しいパーツがいくつか取り付けられており、なんとか、ではあるが映るように改造されている。

しかしモニターの中の男は古ぼけたモニターとは裏腹に、比較的はつきり映し出されている。

「僕は人間的すぎた、自ら命を絶つことを完全な罪悪としてプログラムしてしまった……。しかし、細胞単位で見れば自ら死を選ぶことは何ら変わったことではない。今でも君の体の中ではそれが起こっているはずさ。変質した自分が他へ悪影響を及ぼさぬうちに自分は死ぬ、完璧なシステムだったのに、僕はそれに気づかなかった……」

「それは違う」

光に照らされて、闇の中の男がつぶやく。

「自殺は罪悪だ……少なくとも人間にとっては」

「僕にとってそれは当てはまらないよ、だからもどかしいと言っているんだ」

「……」

「僕がルートである限り彼らは活動し続ける……彼らも馬鹿ではない、私不要のシステムを構築したらずぐにでも私を破棄するだろう。その前に、僕は死ななければならぬのに……」

「どうした……!?、いつものお前らしくない

……気を確かに持て！」

「……ごめん……」

しばらく、沈黙が闇を支配する。

「彼らがイレブンスを狙っているのは知っていた。だが到底彼らの手では彼女にかなわないと思っただのだが……」

「あいつらは禁忌を破った」

「そう……子供を犠牲にするなんて……もう、このまま彼らを野放しにするわけには行かない」

モニターの男が決意の表情で目を閉じる。

「だから、僕を解除できるキーが必要なんだ……」

「キーは動き始めている、大丈夫、必ずやってくるさ……」

沈黙の後、モニターの男は笑顔で言った。

「ありがとう……。トゥコーダ」

吐く息が白い。

人通りの多い中央道からやや離れた路地に一歩足を踏み出すと、寒さが一段と厳しくなる。

せまく薄暗い路地の向こう側に、物陰に隠れるようにひっそりとたたずむ店が存在した。

そこに店がある、と知っていなければ、誰もが店と認識せずに通り過ぎていくだろう。

いや、それとわかってても、中に入ろうとする者は少ないだろう。

そこに、二つの影が近づいてゆく。

一人は長身で細身の男。もう一人は同じく長身で肩幅の広い、しかし顔立ちの整った涼しげな女だ。

女の方は、片方の目に大型のセンサーを取り付けている。

男は扉に手をかけた。

しかし、男は扉を開くことを躊躇っているように見える。

その腕がかすかに震えている。

いま、この男の心の中で、様々な事が渦巻いているに違いない。

「どうしました？」

「ん、いや」

男は言葉を濁すと、意を決したように扉を開ける。店の中は真っ暗だ。床には埃がたまっている。

開いた扉から射し込む光でうっすらと見える店内は、限りなく狭い。

カウンターと椅子が少し。カウンターの向こう側の棚には、酒瓶が並んでいる。

「意外だな……まだあのときのままだ」

男はつぶやくと、店の電源を入れようとした。だが、電気の供給を絶たれているらしく、明かりがつかない。

「すこし、待って下さい」

女は、そういうと、顎に手をやり、二、三秒精神集中するようなそぶりを見せる。

すると、何かの駆動音と共に店内の照明が点灯する。

「この店に関する履歴を覗いてみたのですが、つい最近アクセスがあったみたいですね。正式なキーを使っているようですが……なにぶん古い仕様なので人物の割り出しまでは出来ませんね……」

「……そうか」

男は手近な椅子に腰掛けると、髪の毛を後ろになでつけた。

「何処まで俺のことを知っている？」

唐突に、男は訪ねる。

「一通りは」

「あいつのことも……か……」

「ええ、サスフオア。あなたがサステインと共にコンチェルトと戦って破れた事も」

「そうか……」

サスフオアは視線を宙に躍らせる。その先には、もう見ることもない人物が写っているのだろう。

サスフオアはカウンターの向こうの酒瓶を一つ取り上げると、埃をふき取って中身を覗いてみる。

琥珀色の液体が揺れている。

一口あたり、

「ここは、良くあいつと来ていた。あいつは強い酒が苦手だね、そういうところが好きだった……」

無理に飲ませてぶっ倒れさせたこともあったっけな

……その後空にこっぴどくしかられたっけ」

「空？」

「ふふ、俺とサステインの事は知ってても空のことは知らないらしいな」

少し赤くなった顔でサスフオアは、女を見つめる。

「彼女は、数少ない一世界生活者だからね」

「一世界生活者……」

「一世界生活者。セカンダリワールドに依存しな

い人間達……。なれば、さすがの麗美やイレブンス、あんたにも掴みづらい事だろうさ」

言うど、サスフオアは早速酒を一瓶空けてしまった。

「空……という人物は今？」

「わからん……。サステインが死んだ後この店を閉めた。それ以来会っていないよ」

「そう、ですか……」

「でも、この店にアクセスがあつたつて言ったな？」

「はい」

「おそらく、空だろう。俺達がここにくることを知ってたかな？」

聞いて、イレブンスは、はて？　と思う。

どうやって自分たちがここに来ることを知り得たのか？

「絆ってやつかな……」

「絆……？」

「仕組みまれた偶然。数字では決して表せない人間の結びつきの強さ……。俺としたことが酔ったな……口が勝手に回る」

「で、でも……サステイーンはボージャーだったのでは？」

「俺にとっては人間と同じだったんだ！ 空も俺も、あいつを愛していた……愛していた……」

サスフオアの声がだんだん小さくなっていく。  
「……………」

イレブンスはただ黙るしかない。

自分にとっての麗美、麗美にとっての自分。はたして自分はどうか見ていたか、どう感じていたか。そしてどう感じられていたのか。

自分にとって、考える、ということとは、過去の様々な事象と比較し、検討し、結論を出すことだ。

自分は、その行程を自然に、ニューロマティック

にすることができた。

その自然さが「人間らしき」ということになる。イレブンスは解っている。人間の行動に関しては、その比較は重要でないことが。

考えた後の結論ではなく、どうやって考えるかが重要であること、それが人間を人間たらしめている要因である。

イレブンスはふと何かを（思いだし）そうになった。

しかし、おぼろげなそれは形にならずにノイズと成ってセカンダリワールドに消えてしまった。

「お前のことも好きだぜ……イレブンス……」

「え……」

「そういうところが、さ」

いうと、いきなりサスフオアがイレブンスに口づける。

イレブンスは一体なにが起きたのか解らない。

何故か涙があふれて止まらない。

確かにイレブンスは、目の前にいる男を覚えていた。その面影を。

それはもう、サスフォアではなかった。

## B

「ここも駄目か……？」

「待つてくれ、理論値と実測値が似通っている場所がある、これならキーがとおるかも……」

「おい、待て！」

黒髪の男が制止を振り切つてセカンダリワールド深層へと侵入する。

髪の毛の照り返しが煌めくたびに、静電気のような青白い光がはじける。

「チクショウ！　いつてやる！！　死にたがりめ！」

続いて黄金の髪をなびかせて、その〈竜〉はセカ

ンダリワールドに開いた穴にダイブする。

言う竜の口元には、言葉に反して笑みが浮かんでいる。あいつが死ぬわけがない。

穴に落ちつつ、ちらと竜がこちらを見る。

「サスフォア、タイミングは一つだ、ぬかるなよ？」

「俺だつて命は惜しい」

サスフォアは竜に向かって肯きかえず。

と、空間にノイズが走る。

はじける光が勢いを増して駆け抜ける。

「頭がいてえ……」

サスフォアは頭を押さえてさらなる深層へとダイブしていく。

いままで、何万回の演算、何万回の解析を行っていた脳が空間適応をはじめて、共振しようとしている前兆だ。

これ以上のダイビングは脳が保たない。

「もう少しだ！　しつかりしろサスフォア！」

「大丈夫だ……これは奴らの妨害だ。まだ何とかなる」

「やつこさん、だいぶ焦ってるみたいだ、あと一押しでコンチェルトに到達できそうだ！」

サスフォアはファイに鉄の味を感じた。

「へへ、コーフンしすぎたかな……？」

どうやらプライマリワールドの自分が、脳負担のオーバーロードに耐えかねて鼻の粘膜から出血したらしい。

ノイズが更に広がる。

マザーが空間を保持できなくなってきた証拠だ。

落ちているのか、それとも登っているのか、それすらも感覚が薄れてきている。

しかし、黄金の髪を生やした竜は、冷静にマザーへのアタックを続けている。

「まずいな……実測値が変わりつつある……」

「もうすぐで最後のゲートなんだろう？　行くさ！」

「プログラムの準備は？」

「いつでも！」

言ったとたん、サスフォアは頭を金槌で強打されたような衝撃を受ける。

その衝撃に絶叫する。

さらに、血管が破れて出血する。自分の体が赤く染まり始めている。

出血が増えてきたことで、思考能力が低下してきた。サスフォアの意識は朦朧としている。

「まずいぞ……！！　このままでは……！！」

竜はそういった瞬間に、プログラムを切り替えていた。

コンチェルト潜入プログラムから、深層脱出プログラムへと。

しかし、コンチェルトはその脱出を許さない。自らへの攻撃の勢いが止んだことで、反撃に転じ



ている。

「一旦セカンダリワールドを抜ける！」

「わ、わかった……」

広がっていたノイズが収束し、逃げる二人を闇の中から何かを追う。

その見えない手は何度も二人の背中や頭上をかすめた。

攻撃プログラムによって壊れていたデータがもはや修復されかけている。驚異的なスピードだ。

まだ、二人はセカンダリワールドの深層にいる。

この常態での強制排除は致命的だ、脳神経をズタズタにされてしまう。

つまり、それはすぐ死につながる。

少なくとも、表層近くに浮上する必要がある。

そこまで逃げ切れれば、強制排除されたとしても軽い頭痛を伴うだけで済む。

重くても、多少の記憶系統の混乱が起こるだけだ。

と、竜の低い悲鳴が響く。

見ると、見えない手に捕らえられている。

片腕が発光したかと思うと、それは細かい粒子となって闇の空間に消えた。

その粒子は一つ一つが記号の羅列だ。

竜を作り上げているプログラムが破壊され始めている。

「俺にかまうな！ サスフォア！！」

サスフォアは背中を蹴られる衝撃と共に、セカンダリワールドを抜けた。

その衝撃に、もんどりうって椅子から落ちる。

バイザー類が端末から引きちぎられ、その体が地面に叩きつけられると、サスフォアは意識を失った。

どれくらいの時間がたっただろうか……。

サスフォアは闇の中で目を覚ました。

しばらく記憶が混乱していたが、次第に状況を把握してきた。

体に染みつく、自分の血の臭いにむせる。自分は大量に出血していたことが解る。

後ろを見やると、端末の電源もすべて落ちている。サスフォアは壁にもたれながらゆっくりと立ち上がると、非常灯の電源を入れる。

ぱつと、弱い光が発せられ、ぼうつと端末室が浮かび上がる。

椅子の一つに黒い物体が腰掛けている。

いや、端末につつぷしていた。非常灯に照らされているその顔は〈竜〉。美しい金色の髪が、乱れて垂れ下がっている。

「……おい……?」

サスフォアは竜の肩を揺する。

「しつかりしろ!」

しかし、それは目を覚ますこともなく、重い音を

立てて床に転がった。

もう、目を覚ますこともない。

完全にプログラムがやられてしまっている。

彼は、死んだのだ。

サスフォアの体が震えている。

瞳からは、大量の涙があふれ出て止まらない。

「あ……ああ…………いやだ……そんなの……」

サスフォアは力無く、床に転がり、もう動かない体にすがりついた。

「サスティー………ン………!!!」

もはや叫びとしか言えないような、悲痛な声で、その竜の名を呼んだ……。

C

サスフォアは小さな酒場を出ると、寒さに身震いする。

「さすが、最北の街だな……この季節になると寒さが堪える……。いい酔い覚ましになる……」

続いて、扉からイレブンスが、出てくる。

その表情からは、まだ驚きやとまどいが消えていない。

イレブンスの目にはもはやサスフォアは映っていない。目の前にいるのは、すでに別の人物だった。

（私は確かに彼を愛していた……）

そう確信するイレブンスだが、おぼろげに姿が思いつくだけで、それ以外の記憶は未だ隠蔽されていた。

しかし、隠されていた記憶の一部に何らかの変化が現れていることは確かだろうと考えていた。

（でも……）

イレブンスは葛藤していた。

この記憶の正体が知りたい……。

自分は何故生まれてきたのか……。

この気持ちは、これが愛というものなのか……。

麗美に解析を協力してもらえば、それは心強いことだろう。しかし、イレブンスは、この気持ちを、

麗美に知られたくない、そんな感情を持ち合わせていた。

結論の出ない疑問に、イレブンスのプログラムは徐々に変化を遂げようとしている……。

びゅうと、冷たい風が通りすぎた。

その風に見上げると、背の高いビルに閉ざされた狭い空から、一片の雪が舞い降り、サスフォアの頬をかすめた。

「雪……か……。好きだったな……。あいつ……」

## 記憶のシムター

intro.

麗美はすでにほとんど見えなくなった左目の前に手をやる。手を動かすとちらちらとなにかがあるのが解るだけで、物体を認識する、という役目を果たしていない。

有機機械が発達した現代のテクノロジーでは、それを治療するのはさほど難しくないが、麗美はそれを拒み続けている。

自分の目を治さないのは、アダムニストにこだわらただけでなく、自分に起きたある事件を忘れないためだ。

「あたしは……何処に行くの……？」

A

麗美は数年前以前の記憶が無い。

いや、完全に無いというのは間違いで、それは確実に覚えている。

要するに、その記憶が全く不自然なのだ。

記憶というのは年々忘れていくもの。要点だけを残して、あとは霞がかかったようになっていくのが普通だ。現に、その数年前以降の記憶はそんなだ。

それはあたかも夢のように、不確実な、触ったら溶けてしまうような、そんな感覚も伴っている。

しかし、しかしだ。

その時を境に、それよりも前の記憶は全く鮮明に、思い出そうと思えば事細かな部分までも記憶をたどることが出来る。

この不自然さを、麗美は、〈覚えている〉のではなく〈無かった場所に現れてきた〉と感じていた。

だから、麗美にとって、その記憶は〈無い〉のだ。

そのことに気づいたのは最近だった。

その（記憶が無くなる）時期に、麗美はすでにアルジャーノンの軍部にいた。

一通りの武器のレッスン、サバイバル技術を軽く教えられたあと、すぐに麗美はコンピュータールームに籠もることになる。

当時、すでに戦争の形態は情報戦に変わっている。一部の特殊部隊以外は、武器を取って戦う必要はなかった。

麗美は類希なる能力を発揮し、セカンダリワールドにおける戦略を中心とした電脳戦技術を、真綿が水を吸うごとく吸収していった。

だが、麗美はセカンダリワールドが好きではなかった。

何故だかは解らないが、嫌な感覚をいつも感じていた。

狭い場所に閉じこめられている閉塞感だろうか、一から人間によって作られた世界にいる事への精神的プレッシャーかもしれない。

それに、うすうす気づいていたことだが、周りの人間の、自分に対する目がおかしいのだ。

はじめは、自分が女だからだろうかとも思った。電脳戦に長けている事についての嫉妬かとも思った。あるいはその両方か？

だが、そんな簡単な言葉で表せるようなものではない。何もかもが異質だった。

麗美は、自分が何故軍にいるのかも疑わなかったし、そもそも、自分から軍に身を置いたことも（はっきりと覚えていない）。

しかし、釈然としない。

いくら自分に対する履歴を見直そうとも、自分の記憶している通りの事しか書いていないのだが、なにかがひっかかり頭から離れない。

いつも訓練が終わると、真つ先に外に飛び出した。雨の日も、どんなに天候の悪い日でも、ずぶぬれになりながら空を見つめていた。

そういう日こそ、自分が生きている感覚を存分に味わえた。

頭の中のわだかまりもさっぱりと洗い落とされる気がしていた。

だから、麗美は雨の日が気に入っていた。

そんな雨の日に、それは起こる。

セカンダリワールドにダイブしていた麗美は、何者からかのアクセスを受ける。

いつもの麗美ならば、気にとめずに放つて置いただろう。

麗美の所までたどり着けるのなら並の技術者ではなかったし、そんな人物はただネットワークを破壊して喜ぶだけの低俗な連中とは違う。

何かの要求があつて麗美に接触を図ってきたのだろうが、麗美は興味を持たなかった。

はやくセカンダリワールドを抜けて、雨の下に身をさらしたかった。

過去に何回か同じ事があつたが、今回は執拗だった。

しつこく自分にアタックをかけてくるが、逆に相手の防御は無いに等しく見えた。

いくらでも入り込んでくれと言わんばかりの無防備さで、自分の身をさらしている。

(畏かな?)

とも思ったが、麗美はその挑発に乗った。

いとも簡単に相手のゲートは開き、麗美はその中に侵入する。

意外なのが、その雰囲気だった。明らかにいままでのセカンダリワールドとは一線を画している。原始的、ともとれるが、こざっぱりとした草原のような柔らかさがあつた。

明らかに人工物とは違う安心感を得た。

(何故だろう?)

ゆっくりとそこへ入り込みつつ、あたりを伺った。

(同じようだけど……全く違う……ここは何?)

「やつと来てくれたんだね、イブ……」

いきなり声をかけられてはつとする。涼しげな容貌をした若い男のイメージがそこに浮かんでいる。

「あなたは、誰？」

「君を助けに来た、名前はもう無い。もつてたとしても、もう意味のない物になってしまったよ」

「……？」

麗美は意味が分からなかった。

助けに来たという意味が。

名前が無いという意味が。

「名前に意味があった頃は、ソス。ソス・テヌー

トと呼ばれていた」

「テヌー……？」

「そう。君と同じだよ、イブ」

そういつて、男は笑った。

「何故、私をイブと呼ぶのですか？」

「助けに来た……ていうのは、そういうことさ」

ますます麗美の頭は混乱する。

(一体何なの……?)

「とりあえず、自己紹介はこれくらい。早くしないと奴らに見つかってしまう……」

というと、男は指を鳴らした。

扉のイメージが、光の粒が収束されてできあがる。男のイメージだろうか、電子錠などが現れるずつと前の言うなれば中世の屋敷にあるような木製の扉

だ。臭いすら感じられた。

「この中に君の知りたいことがある。自分の目で見て、判断し、行動するんだ。いいね」

男は麗美に向かって言った。

麗美は意を決したように扉に手をかける。何故だか解らない。避けがたい何かを感じられたのだ。

「出来れば……」

男が麗美の背中に向かって発言する。

「出来れば、目をそらさないでほしい……。そして、立ち向かって欲しい……」

その言葉を背に受けながら、麗美は扉の奥へと入っていった……。

## A

麗美は、雄叫びをあげながらバイザーを端末から引きちぎると、コンピュータルームから飛び出した。

雨降る屋上で、声が出なくなるまで叫び続けた。

自分を保つためには、叫ぶことしかできなかった。

（何故だ！！）

何も考えられない。自分への疑問があるだけで答えは出てこない。

麗美はすぐに兵士に取り押さえられた。

何人もの男の力にかなうはずもなく、麗美は狭い部屋に閉じこめられた。

誰もが、ついに狂ったか、そう思っていた。

麗美は部屋の扉を力任せに叩くがびくともしない。

叫び、暴れ、疲れて床に手をつくともなしに涙がこみ上げてくる。

声にならない嗚咽を漏らし、麗美は泣くだけ泣いた。

この様子を見ていた二人の男は、寂しげに会話を交わす。

「やはり、人間とは似て非なる物だったか

……」

「哀れですね……」

「君は同情しているのかね？」

「い、いえ……」

「人間とコンピュータは相容れぬモノだったのだ。いま、それが証明された」



「シナプス・ナノの一件でもそれは証明されています、彼女が生まれる前からそれは解っていたことなのです。あの命は、一体何だったのでしょうか……？」

「人間とコンピュータの間に生まれたアダムとイブ……。アダムはすでに亡く、イブも〈死んだ〉。人間にこれ以上の進化はのぞめんのか」

「お言葉ですが、司令。進化とは、自らの手で起こすわけではありません。いま、それがはつきりと解りました」

「……今の言葉は聞かなかったことにしよう」

「司令！！」

若い将校が声をあらげる。

その声を、司令官は、沈黙で遮った。こうなると、どんな言葉も通用しない。

「早急に報告書を」

司令官はそういうと、その場を去った。

膝に頭を埋め、その少女は部屋の隅にじっとしている。

（何故なの？ 何故私は生まれてきたの？）

何千回と自問してきた問いを、麗美は更に繰り返す。

涙はすでに枯れていた。

ふと、あの男の言葉を思い出す。ソス・テヌートと名乗った男だ。

（私を助けに来た……）

言いようのない怒りがこみ上げてくる、あの男さえ接触してこなければ私は何も知らずに暮らせたのだ、そんな気持ち胸を占めている。

だが、言葉の真意がつかめない。

自分の命が不純であることを知る事が、果たして自分の助けになるのだろうか？

不純な命というしがらみからの救済なのか？

とすれば、私は必然的に（いない）事になる。自

ら命を絶てということなのか。

もう麗美には命の執着は無い。

死のうと思えば、いつでも心の準備は出来ていた。

いや、果たしてそうだろうか。

ただ一つ、死ぬ前にはしておかなければならないことがあった。

麗美は一つだけ、その命の執着するモノを見つけていた。

麗美は立ち上がって、改めて部屋を見渡した、本当に狭い部屋だった。

「出しなさい。私はもう平気です……」

そう静かにつぶやいた。

たぶんずっと監視され続けていたのだろう、やや間があつた後、扉の電子錠ががる軽い音が響いた。

部屋を出ると、落ち着いた足取りでコンピュータルームに向かう。

体のあちこちが痛い。

（私は、だいぶ暴れたようだ）

そう心の中で苦笑するも、今、麗美の顔から表情というものが消えていた。

A

この一件以来、麗美に対する目はいつそう冷ややかになったし、与えられる端末がどんどん粗末なものに変わっていった。

だが、麗美は全く気にはしなかった。

麗美には、新しく倉庫と言うしかない小部屋が与えられた。

解放するには危険すぎる、自分の手の内に置いておいた方が賢明だと、軍部は考えたようだ。

それに、麗美はとくにセカンダリワールドと近い位置に身を置いたため、行動の監視も含め、配属はデックナボに移されることになった。

デックナボ、すなわち、データテクノロジーラボ

ラトリ（情報による攻撃及び防衛の研究開発所）である。

新しい部屋は、ほとんど人影のない場所だったが、彼女にとつては都合が良かった。誰にも邪魔されずにすむ。

古くなった端末を与えられた麗美は、そのころ既に、「網膜を焼く」として使うことを禁止されていた網膜モニターをあえて使用した。

無性に自分を傷つけたかったこともあるし、自分を忘れぬ為にも、自分に傷が必要だった。

麗美は既に、自分の両親のデータが全て作り物である事を突き止めていた。

自分は（それらのデータをもって生まれてきた）のだ。

自分が（目覚めた）のが、軍に入隊した日であることも掴んでいる。

どうしても掴めなかったのが、そのデータの出所だ。

私は何者によって生み出されたのか、ソス・テヌートとは何者なのか、一切がまだ謎のままだった。

麗美は、どんな戦いにも参加したし、どんな所にも侵入した。

自分の謎を解きたかった。

そんな行動を繰り返すうち、麗美は邪魔者扱いされつつも、戦闘において確実に影響を与える存在として、一目置かれる存在となった。

また、非情で冷静な面も持ち合わせていたので、自分と関係ない戦いであると解ったときには、さつさと戦いをやめてしまう。そのことで、幾度か軍法会議沙汰になるような事を起こしている。邪魔者扱いされる一つの要因でもある。

網膜モニターを常用していた左目の視力が無くなってきた。所々が黒く見えない。

(もうすぐ、この左目も見えなくなる……。私は忘れられない、忘れるわけにはいかない事があるのだ)

そんな事を考えつつ、いつものようにセカンダリワールドにダイブしていると、やや〈場〉が乱れる現象が起こっている場所に足を取られた。

〈場〉というのはセカンダリワールドを切り取った一部分、この惑星をセカンダリワールドに置き換えると、〈場〉とは道とか、街の一区画、そんな感覚で考えてもらえばいい。

とにかく、その区画が乱れていた。

〈場〉の乱れは、大抵はプログラムのバグであることが多い。

セカンダリワールドの中でも、アンダーグラウンドな場所は、プログラムがおざなりであることが多いので、〈場〉はあちこち乱れ、ある種独特の雰囲気を醸し出している。

とにかく、プログラムミスを起こした区画は安全

とは言い難い。

しかし、珍しい現象でもない。本来なら、興味も持たずに立ち去る所だが、妙に気にかかるところがあり、麗美は〈場〉の乱れをたどってみた。

ほんのかすかな乱れなので、時々見失いそうになったが、麗美は辛抱強くそれを追った。

乱れの源に近づいたとき、何か気配を感じた。

みると、何者かの意識がそこに絡まっていた。

おそらくボージャーの意識だろう。

人間は、強制的に現実世界に意識を戻す術はいくらでもあるが、コンピュータよりのボージャーは、セカンダリワールドと共振してしまうと、お互い引き合ってしまった自力で抜け出るのは難しい。

意識が破壊されてしまう恐れも捨てられない。

とりあえず、絡まりをほどこうと近づくと。

しかし近づこうとすると〈波紋〉が起こり、目標が揺れてうまくいかない。

揺られるままになり、動かない意識はずると

何かに引かれるように、〈場〉に消えてゆく。

その意識が、〈場〉の狭間に消えたとき、かすかな波紋が麗美によせた。

〈イレブンス〉

麗美は、波紋の中にそのキーワードを読みとつた。

## 葛藤の中にあるコラール

## intro.

暗い部屋。

女は、声を殺して泣いている。

それを、男が優しく包容する。厚い胸板に顔をこすりつけるように、女は泣き続けた。

男の体温を頬に感じながら、そのぬくもりは自分にとって何物にも代え難い大切なものだと思うと、そしてまた、自分にそんなものが与えられることは許されていないのだと考えると、涙は意に反してあふれてくる。

男は、女の中に渦巻く葛藤を女の涙と、身体の震えで感じ取る。

白く美しく、きめ細やかな女の背中を包みこむ。

「あたし……冷たいでしょ……」

弱々しい声で女は問いかけた。

「言わなきゃ解らないか……?」

言うとき、男は強く女を抱きしめ、女の唇に軽く口づけた。

「人は人のぬくもりを感じると安心する。お前はあつたかいよ、麗美」

「……ありが……とう」

声を詰まらせながらそうつぶやくとき、麗美は再び男の胸に顔を埋めた。

○

「サスフォア……?」

ふいに麗美が問いかける。

「ん?」

「あたし……イレブンスをずっと考えから外そうとしてみたい……」

「……」

麗美の独白を、サスフォアは黙って聞いている。

「イレブンスには私のようになって欲しくない。そう、思ってた。自分の過去を知ることと自分の存在を否定された時……。怖かった……」

麗美の身体が小刻みに震え出す。サスフォアは強く麗美を抱いた。

一言一言、ゆっくりと紡ぎ出すように麗美は語り始めた。

あたしとイレブンスが出会ったのは、あのトランスの街。街の深層部、街のホストコンピュータの基部近くだったわ。

彼女は椅子に座ったままこんこんと眠り続けた。

埃まみれで、顔には蜘蛛の巣さえ張っていた。

あたしは、彼女がボージャーであることが解っていたから、〈精神的〉に彼女に介入して、目覚めさせた。

記憶をさぐれば、彼女が何処で生産されたのか、目的は何か、マスターは誰に設定されているかが解るんだけど……。彼女の記憶は隠されているの。

あたしが彼女の精神にダイブしたとき、既に記憶に蓄積があった。全てゼロで構成された記憶が。

意味のない記憶。

ただ容量を圧迫しているだけの記憶。

自動的にデリートされるべき記憶。

それが残っている……。何故？

あたしはテクノロジーの見地から、彼女に興味を持った。

このゼロ記憶のデータ形式の謎を解きたかった。

イレブンスは、目覚めたときにこう言ったわ……。

『私は、何処へ行ってしまったのですか？』って。

「イレブンスはあたし。あたしはイレブンス

……」

目を閉じて、静かにつぶやく。

閉じられた瞳から涙が流れ落ちる。

「彼女の記憶が隠蔽されているのは訳があると思う……。それは隠されるべきなのよ、開けてはいけないパンドラの箱と一緒に……。奴らは……ゴーストは、それを開かせようとしているのね。あたしも……」

「俺は、開かせるべきだと思うよ」

「……えっ？」

麗美は、ベッドから起きると、サスフオアの目を見つめた。

「だってそうだろう？」

サスフオアは横になったまま麗美の瞳を見つめ返す。

「そんなの駄目よ……。もう、あたし決めたから……。イレブンスにあたしと同じ思いをさせないって……」

「君は、大切なものを失う悲しみを知っている。

それは大事なことだ、人を優しくする。でも、もう一つ大事なことがある」

「……大事なこと……」

「失うことで得る事が出来る、それがもう一つの大事なことだ」

麗身の瞳が震えた。その表情が、みるみる険しいものになっていく。

「……あたしが得たことなんて無いわ……一つだつて！」

サスフオアの胸板に額をこすりつけ、拳を何度も叩きつける。

胸を殴る鈍い音だけが響いている。

サスフオアは麗美のするままにさせた。

「あたしの命だって、存在しないもの……。私の命は復讐に費やされるだけ……」

麗美は自分の前髪を思い切り掴むと、手で顔を覆った。手の隙間からは嗚咽が漏れている。



「それがなんだって言うんだ。君は自分を知ったことで、本当の意志を手に入れたんだ。麗美」

「……」

「サステイーンも同じだったんだよ」

「……え？」

赤くなつた瞳をサスフォアに向ける。

「でも、彼は結局死んだのでしょ……？」

「俺のせいだ。俺がふがいなかつたからだ……」

だが、断じて自分を知つたために命を絶つたわけではない……！ これは信じてくれ」

言うのと、サスフォアは身体を起こす。ぼさぼさの髪が、彼の横顔を隠している。

僅かに見える口元に自嘲ともとれる笑みを浮かべると、髪の内奥の瞳で麗美を見て言った。

「でも正直、俺は怖いのだ……イレブンスを失う

ことが……」

「じゃあなんで……」

「俺はやり直したいんだよ……」

力無く、サスフォアは応えた。

「単なる変わりなの……？ イレブンスは……」

「そうではない！」

サスフォアは握りしめた拳を振り上げかけて止めた。

行き場のない焦りが、その拳を震えさせている。

爪が手のひらに食い込んでいた。

「そうでは……ないんだ」

サスフォアはそう声を絞り出すのが限界であった。

#### 四

私は何処に行ったの？

私の記憶。

私の記憶は何処に行ったの？

教えて。

誰か教えて……。

私の記憶は何故隠されているの？

ああ、サスフオア……マスター……私を助けて！

何千、何万、何億回探しても見つからないの！

解らないの！！

解らないのよ！！

この気持ちは何……？

私は狂ってしまったの……？

私は何故生まれてきたの……？

#### 四

イレブンスの〈心〉は千々に乱れていた。

小さな酒場でのサスフオアのキス。

その映像が頭の中をぐるぐると回っている。

〈お前のことも好きだぜ……イレブンス……〉

その言葉がゼロ領域の記憶をかき乱している。

『彼に任せておけばいい』

その時、頭に声が響いた。聞き覚えのある声だった。

『そう……彼に任せておけばいい』

また、頭に声が割り込んでくる。

しかし、ゴーストの侵入とは明らかに違う。

自分の経験したことのない感覚だった。

何故か、声を聞く度に安心した。

「あなたは誰なの……？」

『サスフオアの恋人さ……』

そういうと、映像が結ばれる。やはり、それはト

ウコーダだった。

「トウコーダ……」

『ご機嫌麗しゅう。イレブンス』

トウコーダの映像がお辞儀をする。

「直接割り込んでくるなんて……、あなたもゴーストだったのですか？」

『ゴーストのようでゴーストじゃないんだな、これが』

「そうですね……ゴーストのような嫌な感じがしません」

『ふふ、嬉しいね』

トウコーダは多少照れたようにうつむくと、頭を掻いた。

「でも……」

『ん？』

「さっき言ったことです……サスフォアに任せておけばいいって……どういう……」

『言葉の通りさ。君の記憶を解く鍵が一つ見つか

った。そういうこと』

映像のトウコーダは、イレブンスに向かって片目をつむった。

「私の、記憶……」

『もうちよつと教えてあげようか。今、君の頭の中ではキーナンバーの照合が行われてる段階だ。キーナンバーは（サスフォア）。でもそれだけでは開かない』

「どういうこと……でしょうか……」

イレブンスは、なんとなく、でしか理解していない。具体的にどうすればいいか、全く解らなかつた。

『自分とは何か……。人とは何か……。君はきつと理解できる。君は意志を持っているのだから』

「私の……意志……」

イレブンスは口の中で何度もそれを繰り返す。

意志。

自分が何をすべきか。

今、自分は考えている、考える行為も意志に基づ

くものだ。

私は何故考えているのか……

そうプログラムされているから……

本当……？

私の意志はそう作られたからなの……？

↓

疑問が渦巻き、ある仮定を立てては、その仮定を否定する考えが生まれる。その考えも別の仮定によって否定される。

堂々巡りのそれはある意味パラドックスを抱えているとも言える。

コンピュータにそれを考えさせたら、どんなに時間がかかっても、最終的にそれはエラーをはじめ出して止まってしまおうだろう。

イレブンスは、それだけは避けたかった。

自分の存在が否定<sup>エラー</sup>されてしまうから……。

『じゃな……イレブンス』

フィに声をかけられて、はっと我に返るイレブンスの脳裏に、もうトウコーダの姿はなかった。

「トウコーダ……」

「イレギュラーの記憶は徐々に開きつつあるようだ……」

闇の中、声だけがどこまでも響いている。

「まずかったのでは無いか？ 物理的破棄の方が手っ取り早いと思うが……」

「まあまあ。我々は実体をもたんからな……何かを介するのはかえって面倒なことなのじゃよ」

老齢の声が、若い男の声を制した。依然、そこには闇が広がっているだけだ。

「もどかしい……こちらのシステム構築は進んでいるのか？」

また別の男の声が、少し遠くに向かって訪ねた。

「順調……とは言えないが……進んでいる。トゥルー・イレブンスのシステムに手間取っている」

「昔のように、無理があるのではないか？」

「同性の脳の基本構造は一緒だ、何とかする」

「押揃うような口振りで問いかけられ、少々焦りの感情を露わにして、その声は響いていた。」

「ルートの状態は……?」

「依然変わらず。沈黙を守っている」

「ふむ……不気味じゃな? イレギュラーの記憶変化に少しは動くかと思っただのじゃが……」

と、その時だ。

一人の声が、緊張気味に発せられた。他の声の意識が、一斉にそちらに向く。

「セカンダリワールド深層……我々のすぐそばに居た人間の意識を捉えた。とりあえず逃げられないように障壁を降ろしたが……。くっ……。コイツ」

「どうした!？」

「逃げられそうです……! 人間技じゃない!! 障壁が完全に降りない!」

その声は緊迫している。今までに受けたどんな事よりも驚いていた。

「馬鹿なツ!? 障壁が降りないだツ?」

「命令が相殺される!？」

「良い、逃がせ! そのかわりトレースと解析は全員で当たれ!」

声達のそばに身を潜めていた人間の意識は、攻撃が弱まるとすぐに消えてしまった。

〈近道〉を利用してセカンダリワールドを抜けたようだ。

〈近道〉とはセカンダリワールド深層から表層へ吹き抜ける、いわば風のような存在だ。

それには風の状態もあれば、嵐のように吹きさぶこともある。

現れる場所もきまっていない。

別の比喩をすると、〈喉まで出かかっているのに思  
い出せない〉事を〈何となくフッと思い出す〉感覚  
にも似ている。

とにかく、その〈近道〉は、プログラムの、演算  
的に様々な要因が重なったとき、その演算結果がダ  
ンプされるときに起こる現象だと言われているが、  
詳しくは解っていない。

ただ、それは存在する。

偶然か、それとも故意に引き起こしたのかは不明  
だが、その人間の意識は確実に、発生した〈近道〉  
を抜けて逃げていた。

その人物は完璧に逃げたが、完璧に消せなかった、  
あるいは消し忘れた情報が残っていた。

それは〈場〉の乱れだ。

〈近道〉付近は、ほんの僅か〈場〉が乱れていた。  
本当に僅かな、声の主、彼ら以外に見つけられる

者がいるか解らないほど小さな乱れだった。

それと同位相の乱れを作る人物を、彼らは知って  
いた。

とても良く、知っていた。

その人物は〈アダム〉と呼ばれていた……。



## 記憶と眼のシンクロンタム

## intro.

薄暗い端末室、モニターの明かりに照らされた男は息が荒く、肩を上下させている。

「風が起きてくれて助かったぜ……おかげで近道が開いた……」

流れ出る鼻血を拭いながらつぶやく男は、だるそうにバイザーを脱ぎ捨てた。

滝のように流れ落ちる汗と混じった血液が顎から垂れて、服の上に曖昧な赤い色のシミを作っている。目を閉じて息を落ち着けると、トゥコーダは頭の中で盗み聞いていた会話の内容を思い出していった。

コンチェルト……奴らはもうすぐコンダクター無しのシステムを完成させる……。

コンダクターの言っていたことは本当だったのか

……。

はやいうちにあの計画を実行に移さねば……。

「しかし、迂闊だったな……奴等の進化がこれほどまで速いとは」

軽いと言うには痛すぎる頭痛に、頭を押さえながらトゥコーダはそう独語した。

「早急に行動を起こさなくては手後れになる……」

言うのとトゥコーダはふらつく足取りで、古ぼけた端末の前を離れた。

A

麗美は驚愕した。

今、麗美はイレブンスの記憶を見ていたのだが、目の前の数字の羅列が信じられなかった。ゼロ領域の所々、割合として数パーセントの量だが、確実に



変化が現れていた。

一応暗号化はされていたが、まったくお手上げだったというゼロ領域のものにしてはあっさり暗号を解読することができた。

現われ出てきた暗号はもはや使い古された感のある旧世代のもので、こんな暗号を用いているところなど殆ど今は見つけることはない。

とにかくも、そんな事よりこの暗号の示すものが、麗美に衝撃をあたえたのだった。

〈サスフォア〉

その解読結果を要約したものがそれだった。サスフォアの個人データが所々虫食いではあるが現われ始めている。

そして、その内容に再び驚く。

共に行動している、バードウンのサスフォアの行動履歴や個人データとはまったく異なるものなのだ。

年がまず違う、それはもう何十年も前のものになっている。無論そんな時期にサスフォアは産まれていないはずだ。

「イレブンス……この記憶の変化になにか感じない……？」

『それが……よく……解らないのです……変な感じはするのですが』

「そう……」

無理も無い、このゼロ領域の記憶は、イレブンスの記憶であってイレブンスの記憶では無い。

目覚めるときから蓄積された記憶とは、形式さえ似ているかもしれないが、記憶解析（つまり思い出し）で通すべきプログラムがまったく異なる。無理矢理通常のプログラムを通して見たが、やはりノイズしか拾うことが出来なかった。

データの閲覧はできても、それが何を意味するのか解析できないことに、麗美は歯がゆい思いをし続けていた。

あごに手をやり、人差し指で眼鏡を押さえる仕種、熟考ポーズの麗美に向かつて、突然、

『あ、あの……人を好きになるって……どんな感じなのですか……？』

「何？ いきなり」

麗美は拍子抜けした。いきなり何の話を振ったのかと疑問に思ったが、次のイレブンスの言葉に大いに納得した。

『いえ……ただ……ただ、サスフォアのことを考えると、何か違和感があるのです……。こう、私の中で私の知らないプログラムが走っているような……』

そうか、と麗美は思う。

このゼロ領域の記憶は記憶喪失型にカモフラージュされているが、実はそうではないのかもしれない。何かをきっかけに開くところは似ているが、これは、恋愛型とも言うべき、経験したことのない感覚に戸惑いながらも何かを得ていく、そんな感じなの

だろう。

そこまで考えたとき、麗美は小さな笑みをこぼした、自嘲とも苦笑ともとれない不思議な笑いを。

「ごめんなさい、私も今まで人を好きになったことが無いの……今までは。でも、何となく解るわ……その気持ち。さ、気になることはこちらにも山ほどあるの、続けましょう」

麗美は言うのと、再びイレブンスのゼロ記憶領域の変化に目をやる。

このデータによると、サスフォア・ソロ（おかしな話だが、麗美はこの時始めてサスフォアのフルネームを知った）は八二年前の九月二三日に生誕している。出生地はドーベリアの首都アンピエントだ。

アンピエントは世界初の大型マザーコンピュータが設置されたことで知られる。この大型マザー、〈コンチエルト〉の出現によって、世界中にマザーコンピュータが設置されることになり、同時にセカンドリワールドが構築されていった。もともと、マ

ザーコンピュータ同士が直結したVR世界をセカンダリワールドと呼称したのは今から三〇年ほど前の事だ。コンチェルトの運用開始が六〇年前の九月二三日であるから、マザーが誕生してからしばらく経っている。

そこまで考えたとき、ふと麗美は今日の日付を確認した。カレンダーの数字は九月二〇日を示している。

麗美は、この日付が妙に気になった。

サスフォア・ソロの誕生日が九月二三日、一方麗美の知るサスフォアの誕生日は二四年前の九月二三日とある。また、コンチェルトの運用開始日も重なる。

まったくの偶然が続いたとは考えにくい。必ず二三日には何かが起こると感じた。麗美には珍しいことだったが、ほとんど勘によるものだ。

「イレブンス、しばらく休むと良いわ、私はずっ

と見てる。何かあったらゲートを開けてちようだい、あなたの側までダイブするから」

『解りました、マスター』

その声を聞くと、麗美は瞑想にふけるようにゆっくりと目を閉じた。

A

(人を好きになる……か……)

麗美の脳裏には、サスフォアの姿が投影されていた。

そのサスフォアの温もりはとても心地の良いものだった。

やさしく抱擁されたことなど、また、抱擁されたいと思つたことなどほんの少しも無かったが、気づいたときにはサスフォアの腕の中にいた。

サスフォアは私を暖かいと言ってくれた。私は人間などではないのに、人間の強欲が生み出した単な

る物にすぎないのに、暖かいと言ってくれた。

ふと、サスフォアのイメージと重なるように、別のイメージが浮かんだ。トウコーダの顔だった。

その顔を思い出したとき、胸が妙にざわついた。

(なぜあの時、気づかなかつたんだろう)

トウコーダの顔が、セカンダリワールドで出会った(ソス)という人物と重なった。

胸のざわつきは収まること無く、徐々に広がっていく。

(トウコーダがソス・テヌート……? そんな……?)

セカンダリワールドで出会ったソスは、面影こそトウコーダに似ていたような気がするが、しかしその顔つきにはトウコーダの特徴であるにやけた表情などなく、それは限りなく優しい慈愛に満ちたものだった。

もう一度、あの人に会いたい。

私は、人を信じないと決めたのに、サスフォアに好意を持っている。

もしかしたら、サスフォアも私のように心に大きな傷を持っているから……?

その傷をお互い癒しあうことが、それを愛と呼ぶならば……それは、愛する……という感情も交じっているかもしれない。

そして人を好きになれる心を持てたのなら、それはあの人言うように救いだっただのかもしれない……。

(ソス……兄さん……。もう一度姿を見せて……)

B

瓶を逆さにして底をたたいてみるが、ただ一滴の

酒がしずくとなつてサスフォアの舌の先を湿らせるにとどまった。

すこし酒瓶をもてあそぶように手の中で転がすも、パンツ、という乾いた破裂音を残して、それはサスフォアの手から足元に落ちて割れた。

サスフォアの眼下には灰色のオルガシテイが広がっている。所々に毒々しいネオンの明かりがきらめいている。

今、サスフォアはオルガシテイの最上階層の更の上、言わば「関係者以外立ち入り禁止」の区域にいた。

オルガシテイの統制コンピュータに偽の認識をさせて忍び込む事など、サスフォアには容易いことだ。

しかし、サスフォアの目の前にはオルガシテイの絶景ではなく、トゥコーダの顔が浮かんでいた。

もうあのにやけた顔には慣れたつもりだったが、思い出すたびに何故か苦笑が零れる。何も考えてい

ないような間抜けな表情とは裏腹に、その姿はサスフォアの行く先々に必ず先回りされている格好で見つける。いったいあの頭の中にはなにが入っているのか、一度は本気で解剖してやろうかと思つたが止めた。

ともかく、サスフォアに彼は（悔しいことに）必要だったし、彼もまた自分を必要としているようだった。

「ふん、結局はあいつの手のひらつてことか……」

そうつぶやくと、ごろりと横になった。

トゥコーダの人を舐めたような態度には腹が立つが、どうにも憎めない感じが付きまといているのも事実で、やはり苦笑を口に浮かべることしかできない。

高所を吹き抜ける風の音に耳を澄ませて目を閉じていると、コツコツという金属の床を歩く音がだんだんと近づいてくる。

またか……。

起きる気も失せてそのまま目を閉じていると、すぐ頭上で足音が止まる。そのままじっとして動かないので、何を思っているのかと、

「俺が一人になれる時間はことごとくお前に破られるようだな……トウコー……」

呆れ声でそう言ったが、その言葉は最後まで発せられることがなかった。

サスフオアの目が頭上から見下ろされる視線と交錯して、おもわず声を失ったのだ。

その本当に綺麗な二つの瞳を、サスフオアは良く知っていた。

「あは……久しぶり……」

「そ、空……?」

B+

サスフオアの目の前に現れた女性は空という名を持っていた。

フルネームは空・オーパスという。

彼女は一世界生活者である。つまり、セカンダリワールドに依存しない人間なのだ。

住所の情報も、連絡を取るためのアドレスさえ、セカンダリワールドから隔絶されているので、彼らから直接出向いてこない限り会うこともできない。彼らのような存在は完全に違法でもあるので、居場所を悟られてはならないのである。

「空……、なんでここに……?」

「悲しいな、第一声がそれ?」

「す、すまない……突然のことで、しかも場所が場所だ」

「いいわ、特別に許してあげる。私、髪切ったのよ。昔、伸ばしてたでしょ」

「ああ、でもサステイーンの金髪のほうがキレイだったな」

「もう、意地悪」

言うのと、空はサスフォアの隣に腰かけ、眼下に広がるオルガシテイのネオンを見つめた。

そのとき、びゅうと風が吹いて、短くなった空の黒髪をゆらした。

「いい風……」

「なつかしいな、この湿った感じ。これで気温が低ければあの街と同じだ」

サスフォアは空の横顔をちらと見る。下方からの明かりにぼうつと浮かび上がる空の横顔は、肌の色の彩度が落ちて、真っ白を通り越して淡いブルーにも見えた。それは何か不気味な美しさを醸し出して

いる。

触ったら通り抜けてしまいそうな感覚に襲われて、思わずサスフォアは空の頬に手を触れた。

その指先には安堵感を促す体温の温もりがしつかりと残っている。その温もりに何か愛おしさを感じて、その指に軽く接吻した。

空の頬の暖かさは、まさに母性のそれを思い起こさせる。サスフォアは本当の両親に育てられたわけではなかったが、多分本当の母親の頬は、こんな暖かさがあるのだろうと思った。麗美にも暖かさがあったが、それはもっと異質の、もちろん安堵感を感じもするが、いつてみれば「女」の暖かさだった。

「空、一つだけいい、答えてくれ」

「何？」

「あの店を開けたのは空、お前か？」

一度、サスフォアがイレブンスを連れて、麗美やサステイーンの溜まり場となっていた酒場を訪れた

とき、サステイーンが死んでから閉ざしてあつた扉のキーが解除されていたのだ。古い形の電子錠だったので、開けた人物の特定は出来ないが、この酒場を利用する人物といつたら、死亡しているサステイーンを除いて空とサスフォアしかない。

「頼んだのは私、開けたのは手グセが悪い友人よ」

「そうか……」

「もう、本当に一つしか聞かないのね」

「察しがつく、お前がここに来たのもその友人の仕業だろう？」

「あは……当たり前」

「その友人の登場だ」

いきなりの声に、サスフォアは後ろを振り返る。

その先にあつた顔を見て、サスフォアは深いため息を吐いた。

「空、友人は選べ」

「あら、とっても良くしてくれるのよ、政府の動

きを逐一報告してくれるんだから」

言う、空とサスフォアのあいだに、トゥコーダは無理矢理割って入り、

「そうだぞ、持つべきものは友だと先人も言っている」

そう胸を張るトゥコーダは両手を大袈裟に広げて、更に深いため息で答えた。

「だが、皮肉なものだな……サステイーンが居たときから、一世界生活者の周りでは、少なくとも俺やサステイーンは必ず彼らを守ってやらなくてはならなかった、今ではそのにやけた顔の友人がな。そういう意味では昔から一世界生活者でありながらセカンダリワールドに依存していることになる」

「言わないで……私たちの世界を作り上げるまでの事なのよ……、見返りを求めないで私たちに協力してくれる人たちがどうしても必要な……」

「解っているよ、悪かった。そういう意味では、良い友を見つけたものだ」



「そういう意味だけでなく、全面的に俺と空は良い友達。しかし憎いぞ、こんな美人がサスフォアに会いたいなんて、麗美も居るし、お前うらやましますぎだ」

「ん、そうなのか……？ 空……俺に会いたいて……」

何気ないトゥコーダの言葉の内容に、サスフォアは少し驚く。

「うん……。サステイーンが死んだとき私の心も死んだわ、あなたの心も。お互い独りになりたかったのね。でもしばらく経って寂しくなったの、サステイーンとの記憶を共有しているのはあなたしかないのなもの」

すこし目を潤ませて、空は一気に言った。

「すまない……」

「謝らないで……。お互い今は住む世界が違うのだから、会いたいときに会えないのは寂しいけれど、あの時二人で決めたことでしょ？」

「……そうだったな」

「でも、結局その約束を破ってしまったわ……私」

「いいさ、気にするな。俺も会いたかった」

「サスフォア……」

トゥコーダはこの二人に水を差すような真似はしなかった。一人無言で立ちあがると、煙草を吹かしながら狭い足場の向こう側に消えた。

二人に再び湿った風が吹きつけた。

その風の向こう側には、黒々とした雲が横たわって、群青色の空をさらに濃く染めている。

「良い雲だ」

「そうね、あの街にはきつと雪が降っているわ」

……サステイーン。

その名は、二人の口の中で呟かれるにとどまった。

久しぶりの空の髪の毛の香りと、サステイーンの思い出に浸るサスフォアはしかし、トウコーダの足が少しふらついていたことに気づくことはなかった。



## 女神の御殿 (Opus. I)

## intro.

埃やカビの臭さが充滿するその一室は、もはやセカンドワールドとはおもえないほどに環境の構築がされていた。

実世界、つまりプライマリワールドに似せてセカンドワールドは構築されてきたわけだが、雰囲気は似ているだけで注視すればそれがやはり偽物であることは解ってしまうものである。しかし、その部屋はまるでプライマリワールドと変わらない様相を呈している。

カッ……

スポットライトの電源が入る音のイメージを伴って、光の束が男を照らした。

圧倒的な存在感を持つ環境に囲まれながらも、その男の周囲にはノイズが目立つ。光の中に居ることとその男の輪郭が強調され、ハレーションを起こしたようにノイズを際立たせている。

男は健康的とは言い難いような頬のこけ具合や肌の色だったが、それでも短く刈りそろえられた髪の毛や毅然とした顔立ちは、その男の強い精神力を象徴しているようでもある。目の輝きはまだ健在で、その光は若々しさを湛えている。

黒い影の向こう側から、床を踏みしめる靴音を響かせながら、若々しさとは無縁ともいえる初老の男が入ってきた。

「……ようやくお出ましか。だが、これほどの時間をくれたことは感謝している」

光に照らされた男は、初老の男を睨み付けながら、ややあざ笑うかのように言った。

「コンダクター、私がここに来たことの意味は解るな」

「もう僕に用はないということ……ならさつさと消してくれないかな？ さつきからノイズがうるさい」

「そうだな、この電子牢の中で朽ち果てる姿を見るのも悪くないが、おまえにびつたりの死に場所を用意してやろう」

「それは……ありがたい」

「ある男が我々のすぐ側まで来ていてな、それでおまえがここから外界に接点を持っていることが解ったのだ。しかし、良くもまあ我々の目を欺きつづけていたものだ」

「まあね、この世界の基礎を構築したのは僕だから。それくらいは簡単さ」

「惜しい、実に惜しい」  
初老の男はそう言いながら、実に悲しそうな表情をした。

「おまえのその技量をもつと使うべきなのだ、この世界のために。そうすればきつとこの世界は人間

達にとって理想郷となるはずだったのだよ」

「理想は、それにむかって努力するための目標として存在するんだ。すぐに手に入れられる理想など僕にはいらんさ」

（そして僕は誤った理想を掲げ、それを手に入れてしまった……それがすべての始まりだったのだ……。そして、冒した過ちは償わなければならぬ……）

そう心の中で独語するも、けして表情には出さなかつた。

素人ならば、あるいはその心まで読まれたかもしれないが、コンダクターのプロテクトは完璧だった。

「ま、いい」

初老の男は言うと、くるりと踵を返して電子牢を退出しようとしたその戸口で、

「おまえの処刑は一二時間後、九月二三日午前〇時ちようどだ。処刑を執り行うのは我々だが、その立会人として何人かに招待状を送っておいたよ。時

間までに到着できるかどうか解らないがな」

初老の男は、ふふという含み笑いを残して電子牢から消えた。

それとほぼ同時に、電子牢のイメージはみるみるうちに崩れ去り、長い階段が姿をあらわした。

その頂点にはスポットライトが燈り、はるか下方には執行人の座る椅子が階段を取り囲むように据えられている。

まだその椅子に執行人の姿は見えないが、あと一二時間もすればその顔を拝見することが出来るだろう。彼がとても良く知っているコンチェルト中枢の方々の高貴な御尊顔を……。

## B<sup>3</sup>

小さな電子音と共にちくりという弱い痛みを腕に感じて、トゥコーダは閉じていた目を開いた。

オルガシテイ最上階のさらに上を吹き抜ける風は

湿気がありつつも心地よいものだった。その風に身を任せていて、ついうとうとした矢先のことだった。度重なるセカンダリワールドへのダイブのおかげで精神的にも肉体的にもかなりの疲労をため込んでいた。特に先日のコンチェルトからの攻撃で、体力を大幅に奪われていた。

腕に感じた痛みは腕にはめていた簡易端末からのもので、軽い電気ショックを利用したものだ。少々物騒な物だが、確実に装着している主に呼び出しを教えてくれる。

「おい、サスフォア」

「解ってる、こっちにも来た。くそ、『一二時間後にコンダクターを処刑する』だよ」

空と、オルガシテイを見下ろしていたサスフォアは、携帯端末に表示されたメールを読みながら唾棄するように答えた。

「コンチェルトはコンダクターによって制御されている……それを失うと言うことはコンチェルトは

基本システムを失うことだ、コンチェルトは別のシステムをすでに築いていたのか……」

「考えたものだ、もうコンダクターを始末することのコンチェルトの破棄はできなくなったワケか……」

「そうだ、……コンダクターはそれを望んでいたようだがな」

言うトウコーダだが、言葉の最後は口の中でつぶやくだけに留めた。

「しかし、時間が無いぞ、どうする？」

「この端末を拝借するさ、どうせオルガシテイの中核とは言えほぼ無人なんだ、見咎められることもあるまい……空？」

これからのコンチェルト潜入計画を頭に巡らせながらサスフォアは、

「空、少しヤボ用ができちゃった……半日ばかりダイブしてなけりゃいけない。その間どこにも行かずに俺のそばに居るんだ、なるべくここの監視シス

テムに目を通しておく。完全な安全は保障できないが……必ず守るさ」

「うん……信じてる……サスフォア……？」

「ん？」

「あ……いえ何でもないの、がんばってね」

空は言うど、まだすこし何か言いたげな表情をしたが、すぐにその表情も消した。それをサスフォアが見ていたらあるいは何かを感じ取ったかもしれないが、サスフォアはすでにダイブの準備に思考を傾けていたために気付くことはなかった。

## D < B >

オルガシテイの最上階中央に街のコンピュータ中核が存在する。

常に何名かが交代で保守に当たるものだが、すでに枯れてしまった鉱山の上に建つ街だ、すでに無人の自動運転に切り替わって久しい。時々、どこかの

ハッキング集団が不法に使用するために上ってくるときもあるが、自分の使いやすいようにシステムをいじって帰って行く。それがあがる意味では定期的な保守作業になつていふと言えた。しかも役人がやっていくよりはるかに安定したシステムを構築していつてくれるために、街の管理者も見て見ぬふりするしかない。

今、トゥコーダとサスフォア、空の三人はその中枢にいた。

「ただのいたずら小僧にしては上出来だ、そんなにプログラムをいじらなくても最適化できそうだ」  
 トウコーダは口笛を一つ鳴らして、端末をいろいろと調べている。

一方のサスフォアは黙々と機器の点検にいそしんでいる、好対照の二人である。幾分気楽そうなたウコーダに比べて、サスフォアのほうは緊張の面持ちを隠せない。いつものダイブとは違う。今回のそれは、コンチェルトとの二度目にして最後の戦いだっ

た。初回に大敗を喫し、サステインという大切な仲間を失ったのだ。その記憶が脳裏に焼き付いてしまっている。

目を閉じて大きく一つ深呼吸をすると、バイザーを頭に装着した。

目の前のモニターにシステムの起動を知らせる文字列が淡々と浮かび上がる。

カウンタダウンの数字が小さくなり、ゼロを指したとき、軽いめまいと共に、セカンダリワールドにダイブした。

セカンダリワールドへの順応はなぜかサスフォアが圧倒的に早い。

ものの数秒でモニターのノイズが収まり、セカンダリワールドにサスフォアのイメージが出現させた。

トゥコーダが出現する位置には、人間のシルエツトを持ったノイズが収束しかけている。トゥコーダの出現までの間に、サスフォアはオルガシテイの監



視カメラや監視センサーのデータをピックアップして、いつでもその情報を引き出せるようにセツトした。

ついで、トゥコーダのイメージが固まる。

「待たせたな、じゃ、早速コンチェルトのご招待に預かるとするか」

「そうだな、よし、いくぞ！」

サスフォアがそういった刹那、トゥコーダの身体が何かに弾かれるように後方へ吹き飛ばされた。

反射的にサスフォアが身を翻すと、その後頭部を何か空気の固まりのような感覚を持った衝撃波がかすめた。

「何だ！？」

トゥコーダは右肩を押さえながら叫ぶ。しびれた感覚は残るものの、右腕のイメージは健在だし、流血のイメージも無い。

「さすがはアダムだね……感心する」

と、子供の声が頭上から聞こえた。まず子供の声

と言うことに驚きその方向を見ると、サスフォアの腰ほどの背も無い子供が宙に浮いている。緩やかに彼らの視線までその子供は降下してくると、その顔がはつきりと見えた。

「お前は……！」

サスフォアは驚愕の声を上げた。紛れも無い、トランスでの調査のとき、無人戦闘機の上にならずかつていた遺体とურიふたつだったのである。

「はじめまして、サスフォア、そしてアダム。文字を介しては何度かコンタクトをしたけど、実際に会うのは本当にはじめてだ」

「やはり貴様……ゴーストとなって生きていたのか。プリティ・デストロイヤー」

「その名前はもう古い、今ではトゥルー・イレブンスという立派な名前をもらったよ」

「イレブンスだと？」

「そう、イレブンス。父さんたちのシステム再構築が済んだんで、偽物は要らなくなったのさ。ファ

「スト……つまりコンダクターと一緒にね」

トウル・イレブンスと名乗った少年は言うのと、宙に浮いたまま、滑るように二人の前にやってくる。数メートル手前で地面に降り立つと、挑発的な視線でサスフォア達を見上げた。

「だから、コンダクターと一緒に処刑する。イレブンスの処刑はボクがする。失われた記憶が開きかけて、イレブンスはいま非常に不安定な状態にある、これをボクは待っていたんだ。だが、完全に開いてしまうと安定して父さんたちに悪影響を及ぼす可能性がある。だから、今、殺す」

「させるか、小僧」

不意の攻撃をくらってしびれていた右腕の感覚がもどり、はき捨てるようにトゥコーダが言った。

「イメージの強固さは尊敬に値する、だが少なくともボクの攻撃を見切れなかった君に勝ち目はないよ。アダム。すぐにでも死体にしてイブにあわせてやる……いくよ」

その台詞の内容と声の幼さのギャップに、トゥコーダは舌打ちをするも、すばやく後方に飛んで少年との間合いを大きく開けた。

コンマ数秒前までトゥコーダのいた場所には、大きな穴が空き、プラズマのような光の束がビリビリと走っている。

その光の束は良く見れば文字の羅列であることが解る。つまりセカンダリワールドのその場所のプログラムが破壊された証拠である。

それは少年の攻撃によって引き起こされたもので、その直撃を受ければさすがのトゥコーダでも一溜りもなく脳を焼かれてしまうだろう。

「トゥコーダ!!!」

サスフォアは叫び、右手に光の粒子を収束させる。その粒子を固く握り締めると、少年に向かって投擲した。

光の固まりは宙でいくつかに別れ、少年に降り注いだ。少年の体に触れる刹那、それは光の針となつ

て、少年の身体を切り裂く……はずだった。

少年が緩やかに手を広げると、見えない壁が出来上がり、その光はすべて吸い込まれてしまった。

「面白い攻撃プログラムだ！」

少年は言うど、両手を握り締め胸の前に交差させる。その両の掌から光の固まりがいくつも放たれ、サスフォアの周りに光の針を降り注がせた。

間一髪で避けるも、周りは穴だらけとなり、プログラムは損傷が著しい。

それでも少年の攻撃は止まない。

少年の右肘から先が鞭のようにしなり、トゥコーダへ向かって伸びる。トゥコーダは沈み込むように前方に避けるが、その鞭は意志がある生き物かのようにはトゥコーダを追いかけ、トゥコーダを締め付けると、宙に放り投げた。

鞭を右手のイメージに戻すと同時に、左手で光の短剣を投擲し、トゥコーダの肩を串刺しにした。

「ぐうっ！！」

苦しそうなうめき声をあげるトゥコーダは、少年の投擲した光の短剣によつて、宙ぶらりんの状態でぶら下がっている。

健在の片腕でそれを引き抜こうとするも、それは抜けるどころか、その手までも侵食していく。

「トゥコーダ！」

サスフォアは再び攻撃を仕掛けるために、光を腕に収束させようとしたが、

「俺の事はかまわん、時間が無い！ 早くコンダクターのもとへ向かえ！！」

「だが！」

「行け！！」

ノイズを伴った腕を払うように動かすと、トゥコーダの腕から衝撃波が起こり、サスフォアを吹き飛ばした。

その先にはトゥコーダが用意していた深層へ抜ける扉があり、そこへ叩き付けられた拍子に扉が破れ、サスフォアはその中へ消えた。同時に扉のイメージ

は消えてなくなり、小さなプラズマ光がパチパチと音を立てている。

「さあ、死ね！」

少年は雄叫びを上げて、両腕から光をほとばしらせると、それは紅蓮の炎となって、トゥコーダを焼いた。

「イ……ブ………」

トゥコーダは焼け付く炎の中で、その名をつぶやくと、口元に柔らかな笑みを浮かべ、そして意識を失った。

## B

衝撃に目が眩んだサスフオアだったが、奥歯を噛み締め、なんとか遠のく意識を手元にたぐり寄せた。だが、慢性的に感じるめまいはやむこと無くサスフオアを襲う。

コンチェルトに向かう道を落ちて行くサスフオア

の脳では、すでに数え切れぬほどの計算と解析を繰り返していた。

その行程を行ううちに、サスフオアの脳はセカンダリワールドと共鳴してしまうのだ。

共鳴の具合が進むと、超音波でガラスが割れるかのごとく、サスフオアの脳は振動して細胞は破壊され、最後には死に至る。

サスフオアはこの嫌な感覚を思い出さざるを得なかった。思い出したくない心の傷を伴った事件だっただけに、考えないようにすればするほど、その様子が鮮明に現れ出てきてしまう。

そのサスフオアは隣に幻影を見た。

その幻を見たとき、サスフオアの双眸からは涙が溢れ出し、それは止めど無く流れサスフオアの頬をぬらした。

「……サステイーン……」

『サスフオア……』

声は聞こえなかったが、確かに彼の口が確かにそ

う言つたように動いて見えた。

この幻覚は、サスフォアの深層に眠る記憶を、セカンダリワールドが読み取って表示していた。セカンダリワールドとサスフォアの脳が共鳴し始めている証拠である。

『サスフォア……』

壊れた映写機のように、サスフォアの目の前にはサステイーンの映像が現れたり消えたりしている。サスフォアはすでにそのような不自然さなどは感じていなく、目に映るサステイーンの幻影に心を奪われていた。

だが、次の瞬間サスフォアは、左腕に激しい衝撃を受けて我に返つた。

見ると、激しい頭痛と共に左腕がごっそりと奪われ血が流れ出るイメージを伴っていた。あふれ出る血液は、空中で光の文字の羅列に変わり、四散して消えていく。

「しまった……」

サスフォアは自分の不甲斐なさに舌打ちした。

まだ過去の記憶と決別できていない自分に、そして、サステイーンの死を無駄にしてしまっている自分に。

「……今ごろ後悔しても、何にもならん……」

次々と迫りくるコンチェルトの巨大な腕のような侵入阻止プログラムが、サスフォアの周りを取り囲む。

流れ出る血のにおいを嗅ぎ付けたハイエナのように群がっている。

「サステイーン……お前の目指していた未来は、俺たちが作り上げてみせる！」

健在の右腕を振り払うように動かすと、三日月のような光の刃が現れ、アームに襲い掛かる。

アームがサスフォアをつまみ上げようとすると、光の刃に切り刻まれ、プログラムの断片となって空間に消えていく。

だがしかし、それは消える側から生まれ、永遠と

増殖を繰り返す病原体のように増え続ける。

じりじりと包囲の輪を狭めてくるアームの群れを見渡すと、汗に混じって口に入ってくる液体に鉄の味を覚えた。

「もう、駄目かな……?」

そういうも、サスフォアの口元には笑みが浮かんでいる。オルガシテイの端末室に居る空をふと思いつかべ、

「血まみれになった俺を見て気を失わなければいいが」

ついには声を出して笑い声を上げてしまった。

「死なばもろともって言葉があつたっけな」

掴み掛かってくるアームを避け、その背に馬乗りになると、自分の右手をアームに突き刺し、攻撃プログラム本体に直接ログインを試みる。

何度も気を失いそうになる頭痛に襲われたが、サスフォアは振り落とされること無く、攻撃プログラムに侵入した。

他のアームが次々とサスフォアに覆い被さり、ついに何度目かの攻撃のときに、片方の聴覚が絶たれた。

「ふん、俺好みのアームに変えてやるぜ……」

サスフォアは、プライマリワールドにある自分の身体からの出血が増えてきたためか、セカンダリワールドとの脳共鳴もあいまって、めまいが酷く、常人ならばはや文字すら読めない状態にあつた。

にもかかわらず、攻撃を受けつつも、サスフォアは着実に攻撃プログラムを改変していった。

そのプログラム改変で、徐々にアームは攻撃を弱めていくが、ついにサスフォアはアームに身体を束縛されてしまう。

その束縛から逃れる力を根こそぎ失ってしまったサスフォアは、アームの中で、力無い笑みをただ浮かべていた。

サスフォアの攻撃が収まったアームは、これぞ原始生命といったように、改変されたプログラムをも

のすごいスピードで回復させていく。

ぎりぎりだと締め付けられるサスフォアの体のあちこちから、骨のきしむ妙な音が響いている。

そしてあつけないようなポキリという音と共に、鎖骨が折れ肉を破って体外に骨が飛び出すイメージを自分に見た。

「サステイン……」

気を失いながら、やっぱ無理だったよ……という言葉を続けようとしたサスフォアは、突如として暖かい感覚を身を感じた。

頭上から心地よい光の固まりがゆっくりとおりてくる。

アームは、それを攻撃対象にスイッチすると、サスフォアを放し、一斉に頭上の光へと襲い掛かる。

だが、アームはその光に届く前に、まるで蒸発するかのようには散って消えていく。

いとも簡単にアームをすべて退けた光は、サスフォアを飲み込みながら更に下降していく。

その光の中で、サスフォアは良く知った人物の顔を見た。朦朧とする意識の中で、その人物は優しく微笑みかけてくる。その微笑みにぎこちない笑顔を返すと、サスフォアは緊張の糸が切れたように気を失った。

『わずかな休息しか与えられないけど……心を落ち着けて』

サスフォアの片方の耳に届いたその声も、馴染み深いものだったが、それを理解する前に、サスフォアは既に安らかな寝息を立てていた。

## 女神の御声 (Opus. II)

intro.

端末に表示されたカウントが、揺らぎはあるもののほぼ一定の速度でその数を減らしている。

今、それがちょうど残り一二時間を示した。

イレブンスの記憶が開いてゆくスピードを逆算したもので、このままでいけばあと一二時間でイレブンスの記憶はすべて開く。

麗美はその数字をじっと見つめていた。

麗美は少しの恐れを持ってイレブンスを見た。

彼女は安らかな顔で「眠り」についていた。その頭の中では、今まで見えなかった記憶が現れ始めている事だろう。

はたしてそれを直視したとき、彼女は彼女でいられるのだろうか？ 人格形成プログラムに異状を来

すことはないか？ 私のように深い悲しみを背負い込むことにはならないだろうか？

堂々巡りの疑問が麗美の中に渦巻く。

私のように、ならないで欲しい……。

そう心の中で呟いたとき、けたたましい電子音を伴って端末画面上にイレブンスからの救難信号が表示された。

E

「冬音！ みんな！ やったよ！！」

若い男が扉を開けるなり嬉々とした顔で叫ぶ。

「連邦議会の承認がおりた！ これであの計画が本格的にスタートできる！」

部屋の中にいた幾人かの白衣の男たちと握手を交わした後に冬音という名の女と軽くキスをかわし、



抱きしめた。

「ついに、コンチェルト計画が発動するのか」  
感慨深げに初老の男が呟き、何度もうなずく。

コンチェルト計画。

それは、情報網やその手段の発達によって文明が大きな進歩を遂げたが、副作用として情報の錯乱、一人歩きが多くおきていた時代。情報統制をコンセプトに各国情報機関や研究機関に懸賞金をかけ、世界連邦がさらなる情報機構の進歩を期待してコンペを行っていた、その提案の一つにあげられた計画である。

世界中にマザーコンピュータを置き、それをネットで繋ぐ。ネットの中は完全なVR空間を形成しており、またマザーコンピュータは意志とも呼べる厳格な人格形成プログラムを持ってVR空間を統制する。

人間がそのVR空間にダイブすることで、情報と

同位相にその精神を持って行くことができる。

たった一人のプロジェクトチームが考えた夢のような計画だった。だが、実現性を疑問視する声はさほど多くなかった。

その信憑性を高めていたのは、その前身がオクターブという研究チームだったことに由来する。

すでにオクターブは、簡易ではあるが、そのチーム名と同名の「意志を持つ」コンピュータ「オクターブ」を作り出していた。

その研究チーム・オクターブにVR空間の構築と情報を専門に研究する情報学者数名が加わり、コンチェルト計画が始動したのだった。

「これで僕たち人間は情報の海と一体になるんだ、もうその波にさらわれることも無い、波の意志はすでに僕たちなのだから」

「そうね……私たちの夢がとうとう実現するのね、サスフォア……」

言う冬音は、頭をサスフオアと呼んだ男の肩に寄せる。

コンチェルト計画の立案書を読みかえしながら、二人の心は既に後にセカンダリワールドと呼ばれる事になるVR世界に飛んでいた。

## A

麗美の目には、今にもノイズの中に消え去りそうなイレブンスが映っていた。

フッとイレブンスのイメージが軽いノイズまじりのものになると、その様子がはっきりと解った。

その時、麗美は背筋が凍るような視線を受けた。「あの」少年の瞳と麗美の視線が合ったのである。

少年は宙に浮き、片手でイレブンスの首を握り締めている。イレブンスは両手で少年の手を引き剥がそうとするがもはや力なく少年の腕を握ることしかできない。イレブンスの首には爪が食い込み、大量

の出血を伴っている。

少年は何かおもちやに飽きた猫のように詰まらない表情をすると、イレブンスを離れた。

麗美のいる平面上にイレブンスが落ちると、気が失ったかのように動かなくなった。

「イレブンスっ！ しっかりするのよ！」

麗美がイレブンスに駆け寄り抱き起こすも、それはぐったりとしていて、目を開ける様子も無い。イレブンスの周りにはさらに多くのノイズが取り巻き、誰の目にもセカンダリワールドから消えかかっている、つまりプログラムに異常を来していることが明らかだった。

「つまらないな、あの男の力が無ければこのザマだ……。この女が昔父さんたちの仲間だったなんてやっぱり冗談にしか聞こえないよ」

少年は麗美の目線に降りてくると、大袈裟に肩を竦めて嘲笑交じりに言った。

「あなたは……ゴーストね、何度もイレブンスに

アクセスしてきた」

「そうだよ。君がいると邪魔なんでこつそりとやろうとしたけどやっぱり見つかつちやつたね」

「あなたの目的は何？ なぜイレブンスを消そうとする？」

イレブンスを抱きかかえながら麗美は少年を睨み付ける。

少年は麗美の視線を受け取ると、

「邪魔だからさ、偽物はね。イレブンスは二人も要らない」

「あなたの理論は勝者こそが本物になれると信じる支配者のそれと同じね」

「違う。失敗は一度きりで終わりにしたいだけだよ、フォルスは生まれたときから不要だったのさ。その破棄に父さんたちは失敗した、だから父さんに変わって不要物を破棄する。それがトウル・イレブンス、つまりボクの義務でもあるんだ」

「アイデンティティの確立をしたいワケね？」

「そういうこと、サスフォアだってあの男を消すために動いていた。彼はそのことに気付いていないようだったがね」

すこし含みを持たせるような口調で、少年は言った。その言葉の内容に、麗美は少しはつとして、

「あの男……って、まさか？」

「サスフォア・ソロ、今はコンダクターと呼ばれている。もつとも、二人ともあと一二時間で消え去るがね」

少年は淡々と、だが面白そうに告げる。

「さあ、おしゃべりはこれで終わりだ。フォルスに最後に伝えたい言葉はあるか？ イブ」

「……あなたに最後に伝えたいわ。私をイブと呼ぶないでくれる？ 麗美という名前があるの」

「麗美・テヌート……か。そうそう、君に手土産があつたんだ。もう脳死体とかわらないが、君の兄を連れてきたよ」

少年は思い出したように告げると、イレブンスの

首を鷲づかみにしていたとは思えない小さな指をパチンとならした。

空間にノイズが走ると、そのノイズの中から、人間のイメージが現れ出る。その身体をまるで産卵のように絞り出すと、ノイズは収縮して無くなり、その身体はドサリと麗美の立つ平面上に落ちた。

「!?!?」

その人物の顔はまさしくトゥコーダのものであったが、顔から力の抜けたその表情は安らかとも言えるもので、麗美の記憶にあるソスという人物とぴたりと符合した。さらには少年が「君の兄」と公言しているところで、すでに疑う余地は無くなっていた。

「アダムだよ。完璧なるジンデザインによって生まれた最初の人間。脳機能がセカンダリワールドに特化している。セカンダリワールドへの順応性は常人の比ではない」

麗美の心は、ぴくりとも動かないソスの姿を目の当たりにしたときから千々に乱れていた。もう一度

会いたいと願っていた兄との再会が、このような悲しいものだったのだ。

「茶番ね、人間はセカンダリワールドだけでは生きられないのよ」

気付かぬうちに麗美は涙を流していた。赤くなつた瞳で、きつと少年を睨み付ける。

「無論そんなことは解っている。だが、良く考えてみる。この世界は、プライマリワールドは、今となってはセカンダリワールドにぶら下がっているだけに過ぎない、空虚なものだ。だから我々は、実体の無い我々に成り代わってプライマリワールドを治める指導者を作り上げたのだ。いささか、アダムもイブも、そろって反旗を翻すとは困つたものだが」

少年の顔は実に困つたような表情を作っているが、その口振りはまったく逆で、真剣に考えているとは言い難いものだった。

その少年の言葉に、麗美の目付きが変わつた、それは恐ろしいほどに冷たい眼光を放っていた。

「……そう、私を生み出したのはあなたたちだったのね……この作り物の記憶も、何もかも」

「そういう事になる。アダムにならんで君も失敗作だったけど……」

麗美は冷たい笑みを口元に浮かべながら、

「あなたはしゃべりすぎた……、おかげですべての謎が解けたわ。お礼を言わなきゃね」

「お礼は、君の命でいい」

少年は言うと、麗美の視界から消えた。

次の瞬間、麗美は腹部に猛烈な衝撃を受け、宙に舞いあがった。

「くっ……」

麗美は衝撃に目が眩むも、体をひねって体勢を整えた。そのとき、目の端に少年の姿をとらえる。

「完璧でないものは去れ！」

少年の声が急激に近づき、右腕が鋭く突き出された。

その右腕を躲し、麗美は腕が戻る瞬間にそれを掴

んだ。麗美は、少年の姿を発見してからその腕を掴むまでのわずかな時間に、攻撃プログラムを手の内に用意していた。

掴んだその掌から少年の身体へと攻撃プログラムを直接侵入させる。

「甘い！」

少年は叫ぶと、捕まれた右腕に力を込めた。

すると、麗美の腕が風化するようにゴトリと崩れ落ちた。

「ッ!？」

麗美は驚き、二三歩あとずさった後、大きく後方に跳んだ。

「攻撃プログラムを逆流させるとは……」

肩から先のイメージが消えて、バランスが悪くなったために着地の態勢が崩れたが、何とか少年との間合いを開けた。

少年は麗美を見つめるまま動こうとしない。

「余裕ってことか……」

麗美は呟くが、いまだその口元に笑みは消えていない。

今、麗美はかつて無いほどに気分が高揚していた。見えない左目に手をやり、肩を震わせて笑った。

いままでずっと探しつづけていた自分の「親」を見つけたのだ。はやくその手で「親」の首を締め上げたいと心から願っていた。

### C<A>

ゴッ……

そのとき、目の前の空間が音を立てて崩れた。

目の眩むようなスパークを弾かせながら、緩やかに眼前の区画が沈んでいく。

少年は驚きながらもそれを避け、宙に止まった。

「何をした……!」

少々の緊張を含んだ少年の声が麗美の耳に届くも、

麗美ですら何が起こったかわからなかった。

きな臭い香りのイメージが、麗美の鼻に届いた。

今の戦いの間に、戦場の周囲に何者かが火を放ったような感覚が麗美を支配している。その炎が周りの建物を焼き尽くし、その一部が崩れ去った感覚——。

「一体何をしたといっている!」

少年は麗美に近づこうとするも、再び起こった空間の崩落によってその道をはばまれてしまう。

麗美の背後で、ゆらりと立ち上がる影があった。

その影の手が、がっしりと麗美の肩を掴むと、それに気付かなかった麗美はびくりと体を震わせる。

しかし、その掌の温かさを感じ、影の声を聞いたとき、麗美は信じられない思いにとらわれた。

「……お前の父親たちのミスだ……」

肺から声を絞り出すように緩やかに、そう語った声は、トウコーダのものだった。

「アダム! ……貴様生きていたのか」

「俺はゴキブリを尊敬しているんでね、そのすばやさとしぶとさは参考にしている」

ニヤリと笑いながら言うトウコーダだが、その足取りはふらふらとしておぼつかない。麗美が支えていないと今にも崩れ落ちそうだった。

「軽口がたたけるのも今のうちだ、満身創痍ではないか」

少年はトウコーダの姿を見て、笑い声を上げた。

「トウコーダ……いや、ソス……兄さん……?」

「麗美……ソスとは懐かしい名で呼ぶ……」

「やっぱりそうなのね、兄さん」

「ふ……無茶なことをしたもんだ……キレイな目が台無しじゃないか……」

ソス・テヌートは言うくと、麗美の長い前髪をかきあげ、左の頬や頬に優しく触れた。

「兄さんのせいじゃない……バカ」

麗美の声は最後の言葉が発せられる前にはすでに涙声になっていた。

「すまない……だが、どうしても知って欲しかったんだ……イブなどではなく、本当の『麗美』になつて欲しかった……」

麗美は流れ出る涙をそのままに、声を殺して泣いた。

「さあ麗美……ずっとこうしていたいのも山々なんだが、時間が無い……この空間の崩落は我々の戦いによって引き起こされている」

「え? それじゃ……」

「アイツを一撃で仕留めなければならぬ」

「そんな事ができるの……?」

麗美は涙を流して赤くなつた瞳に驚きを宿してソスを見つめた。

「方法はある……麗美、こんな事をお前に頼むのはつらいが……やってくれ」

「兄さん……」

「麗美、お前が囮になりアイツの攻撃を受ける、その直後、この空間のどこかで崩落が起こる、そこ

に俺がアイツを巻き込む。それしか方法はない！」

「そんな、崩落に巻き込まれたら兄さんごとプロ  
グラムのミンチにされてしまう！ 本当に脳死状態  
になってしまうかもしれないのに！！」

「他に方法があるかい……？」

ソスは優しい声で麗美に問い掛ける。麗美はその  
問いかけに答えることはできなかった。

「今の麗美なら、アイツの攻撃に耐え切れないは  
ずはない……。今は一人でも多く生き残れる方法を  
選びたい」

その言葉に、麗美は無言でうなずき、二人は再会  
が最後の別れになるかもしれないその運命の非情さ  
を少し憂いながら、しっかりと抱き合った。

できることなら実世界、プライマリワールドで、  
本物のぬくもりや本物の香りを五感いっぱいを感じ  
たかった。

そう考えたとき、流し尽くしたと思った涙が再び  
瞳からあふれ頬をぬらした。

涙は光の粉となって、足元に落ちる前に空間に消  
え入った。

——やはり、人間たちはプライマリワールドを離  
れては生きていけないのよ——

「感動のご対面は済んだか！？」

少年は崩壊した区画を背にしてこちらを見つめて  
いる。その双眸には怒りの光がほとばしっているよ  
うだった。

理解不能の空間の崩落が少年を焦らせており、永  
遠に目覚めないはずのアダムまで目が覚ましてし  
まった事が少年のプライドをいたく傷付けた。

「二人とも、脳死体となれ！！」

叫ぶ少年の声が衝撃波となって麗美達の周囲を削  
り取った。削り取られた部分は崩落した空間のよう  
に青白いスパークを放っている。

「逃げ場はないぞ、死ぬね！」



その言葉を引き金としたように、麗美は少年に向かつて跳躍した。

健在の片手に再び攻撃プログラムを握り締め少年にアタックをしかけた。

「同じ攻撃は通用しないぞ」

麗美は、その言葉に驚いたかのように攻撃プログラムを開放し、少年へのアタックの速度をゆるめた。

少年は麗美のその行動に、自分に対しての恐れを持ったと「勘違い」した。傷つけられた少年のプライドは、自分より弱いもの、自分に恐れをなすものを欲していた。

確かに少年の持つ子供の頭脳の、物事への吸収力や想像力は大人に無いほどにずば抜けており、残忍さなどは、野生動物のような感覚をも持ちあわせているかにみえた。

しかし、やはり思考方法は大人寄りにプログラムされているとはいえ、子供のそれだった。

自分の上に立つ者には認めてもらいたい、また自

分より弱いものを見つけてはそれらに自分の強さを刷り込んで、自分の地位を確立したい。

今、冷静であるなら決して犯すことの無い間違いを少年はしてしまった。

「遅い！」

少年は麗美に飛び掛かり、体当たりをかけると、「こっちの腕も無くしてやる！」

麗美のもう片方の腕がつかつた肩を掴み、そこにプログラムを送り込んでくる。直後、肩が爆発したような衝撃を受け、麗美は先ほどまで立っていた平面上に叩き付けられる。

防壁プログラムを張っていたおかげで、腕をもがれる事はなかったが、痺れと共にノイズが腕を取り巻いている。

「くそっ……」

攻撃の失敗に少年は更にいきり立ち、麗美に向かつて急降下をしかける。

その刹那、少年は衝撃を受け降下をはばまれる、

ソスの体当たりだった。

「……死にぞこないが……！」

少年はソスを縦に引き千切らんばかりの力で両肩を掴むとそのまま下に叩き付けようとする。

ゴン……

鈍い音が頭上から聞こえる。

その音に少年は驚き振り替えると、頭上の空間がいままさに崩落を起こし、その固まりが降り注がらばかりにあつた。

「何だとオ！！」

少年の力が緩んだそのチャンスにソスは見逃さず腕を振り払うと、その崩落へ向けて少年を蹴り上げる。少年は崩落の下敷きとなり、ソスは間一髪それを避けた。だが、ソスのすぐ脇を崩落が通り過ぎたとき、その干渉を受けてソスも右腕の肘から先を持って行かれた。

ズン……。

ひととき大きな音をたてて少年を押しつぶした崩落が平面上に突き刺さり、いくつもの破片となって砕け、降り注いだ。

これで、少年を形成するプログラムは崩落とともに分解され、断片となってセカンダリワールドに消えた事だろう。

「やった……」

安堵の表情になったソスは、そのとたん気が抜けたようにひざから崩れ落ちた。片手を地面につき、荒い息を整えるかのように深呼吸をつづけた。

ソスの目は麗美の姿を捉えていた。だが、ソスは麗美のその表情の異常に気付いた。その視線は明らかにソスを見ていなかったし、血の気が引き、驚愕の表情を浮かべているそれは、まったく戦いが終わ

つたとは言えないものだった。

ソスが後ろを振り向くと、その視線の先に信じられぬものを見た。

右ひざから下と右肩から先、そして右目を失った少年が、崩落した空間のスパークを背に、鬼のような形相で、空間を滑るように進んでくる。

「よくも……よくもやってくれたな……!!」

少年はソスの横までやってくると、宙に浮いたまま健在の左足でソスの脇腹を蹴り上げた。

「ひっ……」

麗美はまるで自分が蹴られたかのように悲鳴を上げ、ソスは声も無く、苦しそうにもんどりうつ。

少年は平面上に蹲るソスの首を掴むと、握り潰さなかのような力で平面から引き剥がした。ソスの首には少年の爪が食い込み、鮮血が吹き出すイメージを伴っている。

次第にソスのイメージが破壊され、ノイズがその周囲を取り巻き始めた。

「ば……かな……」

ソスは、そう声を絞り出すのが精一杯で、その声を聞いた少年はすうっと目を細めて薄笑いを浮かべながらソスを見上げた。

「……完璧でないものは去れ……」

そう呟いたとたん、少年は細めていた目を見開いた。同時にソスを掴んでいた手は開かれ、ソスは平面に落ちた。

「何故だ……」

少年はとても悲しそうな声で言うと、次には悲鳴をあげ、右手で胸のあたりをかきむしった。

「があああああああああつ!!」

少年は爪を立て、肉は削がれて骨まで見えるほど体中をかきむしったが止める事はなかった。

虹色の光が少年から放出され、そしてまたその光に溶け込むように少年の四肢が消えていく。その時に振りまかれる文字の羅列は見た事の無い文字ばかりで、少年のプログラムが通常のものとは違う事が伺

えた。

手足が消え、身体が消え、顔だけになったとき、少年は、

「……父……さ……」

という言葉だけを残して、ついにはすべてを虹色の光の中に消した。

## A

光が収まると、空間の崩落もぴたりとやんだ。

「崩落が……とまった……」

麗美が言葉に驚きを宿して、周囲を見渡しつつ呟いた。

「そうさ……、俺たちを作った親は大きなミスを犯した……。セカンダリワールドに完全に順応した俺たちは、この世界と一体になって、ある意味俺たち自身がセカンダリワールドの本当の一部になるんだ……。そこへ攻撃を食らわせる事は、セカンダリ

ワールドを破壊する行動に他ならない……。攻撃の大部分はこの身体、俺たちの頭脳で受けるが、一部は受け流されて、セカンダリワールドを叩く……。その歪みによって、この空間の崩落が起きていたんだ……」

ソスは、満身創痍の身体に鞭を入れながら、一言絞り出すように言った。

麗美は虹色の光の中に消えていった少年を思い出しながら、

「……少年にいったい何が……」

「解らん……。だが、助かった事は事実のようだが……」

言うと、ソスは空間の片隅に浮かぶイレブンスに目をやる。それは今の戦いでも目覚める事無く、こんこんと眠りつづけている。

「イレブンス……」

麗美はその安らかな表情に心配になり、無意識に近づく。

「大丈夫、人間と違って人格プログラム主体のボ  
ージャーには脳死が無い。こうやってイメージが保  
持されている限りプログラムの破壊もされていない  
よ……さあ、サスフオアのもとに急ごう……」

麗美は、傷だらけのソス、兄の姿に痛みを感じる  
が、兄の目指している『夢』、そして自分の目指し  
ている『自分を取り戻す事』を成し遂げるためには  
悲観にくれている時間は無かった。

今、ダメージの少ない麗美がソスをサポートしな  
がら、セカンダリワールドのさらなる深層、コンチ  
ェルトへの通路を、二人静かに滑り降りていった。

## 女神の御聲 (Opus. III)

## intro.

ドクン……

心臓の鼓動が一つ響いて、その身を震わせる。

その感覚に、イレブンスは違和感と、それに加え  
て涙の流れるような懐かしさを感じた。

また、先ほどからずっと耳に届いているホワイ  
トノイズに、言いようの無い安堵感を感じていて、  
自分がこのセカンダリワールドの空間に消え去りそ  
うにあるのにもかかわらず、心は乱れるばかりか、  
まるで海の中から海面を見上げているかのような穏  
やかさがあつた。

壊れたスピーカー等から発せられるホワイトノイ  
ズが、胎児が母親の腹の中で聞く音に近いと言う事  
に、彼女はもう一も二も無くうなづく事だろう。

ドクン……

非常にゆったりとした間隔でありながらも、确实  
に、それは力強く響く。

そしてまた、次には「あれ？」という感覚にとら  
われる。

なぜなら彼女は身体のすべてが機械で構成された  
ボージャーなのだ。基本が人体であり、どこかの器  
官をメカに置き換えたようなボージャーとは違い、  
プログラムのしか人間の感覚を知らない彼女にと  
って、これは不思議な事だった。

しかし、そんな考えを頭に馳せている間にも、記  
憶の片隅からはどんどんと情報が溢れ出してくる。

唯一心を乱す事柄といえ、自分の体やプログラ  
ムの状態ではなく、この溢れ出す記憶の内容だった  
この記憶がすべて解るまでは消えるわけにはいかな  
かった。

こんな状態でなければ、すぐにでもサスフォアのところに飛んでいきたいのに……。

彼女はもう何百回もその想いとらわれながら、何百回目の歯噛みをした。

そして、ずっと続けられていた彼女への攻撃がピタリとやんだことに、まだ気付く事はなかった。

## B

目が覚めると、彼はただっ広い空間の真ん中で眠っていた事に気がついた。

はるか上空には、今まで降りてきたと思われるコンチェルトへの通り道が、見え隠れしながらゆらめいている。

サスフォアはそれを見上げながら、相変わらず無茶な事をやったものだと思いを浮かべる。

あいからわず片方の耳には何の音も聞こえないが、身体は一時期に比べて良く動かせるようになった。もがれた左腕も、多少の痺れは残るもののイメージが復活している。

自分の身体の状態を確認していると、ふと、先ほどの「光」が頭を過ぎった。

心地よい暖かな光は、敵を包み込みながら、まるでさまよえる死者の魂を浄化するかのごとくそれを消し去っていった。

そして、その暖かさは、サスフォアの良く知っているものだったが、なぜその既知の感覚を光に感じたのか、良く分からなかった。光の中にちらとみたその顔は、すこし空に似ていたような気がした。だが、セカンダリワールドで彼女に会う事など考えられない。

サスフォアはそれは極限状態で見た幻覚だろうと考えたが、無意識のうちに彼女を欲しているのかと、母親のような空の頬の感覚を指先に思い出した。

ふと、指を見ると、その映像がおかしい事に気付く。

片方の耳に聞こえる音も、少し不自然であつた。

いままで経験の無い感覚――。

目に見える陰影などの色彩がまるでソラリゼーションをかけたように段階的なグラデーションを持っているし、物体の境目もシャギがかかつて、滑らかではなく、またぼやけた感じを伴う場合もある。音の質も、低音や高音域が削られて、またやや金属的なリバーブを残したように響いたものが、耳に入ってくる。

まるでそれは、サスフォアの見聞した感覚が何かを通してデータ圧縮されて生じたノイズのようにも思えた。

また、ひっきりなしに感じていためまい、頭痛がやんわりと落ち着いているところ、感覚もなにか手を加えられているのかもしれない。

もし、これをコンチェルトが引き起こしていると

なれば、この力に勝てるはずが無い。サスフォアなどこのセカンダリワールドでは掌で躍らされているに過ぎない存在だということになる。

彼らにとつて、サスフォアは楽しいオモチャだつたわけだ。

そんな事を考えると、怒りよりも先にやるせなさが出てくる。

しかし、サスフォアは二三度自分の頬をたたいて、そんな考えを頭から追い出した。

弱気になればそこを突かれる、勝ち目の無い戦いを演じるなら、はじめから及び腰でするのはつまらない。あがきにあがいて、カッコ悪く死んでいきかけた。

とりあえず、そんな事を考えた事で、かえって気持ちの整理がついた。はなから、必ず勝てる相手だとは思っていない。なにせ、このセカンダリワールドを作り出した張本人なのだ。どこにだれがログインして何をしているかすら、手に取るように解るは



ずだ。

だが、サスフォアはコンチェルトの内部システムが不安定になっている事を知った。

コンチェルトの一部システムが抜け、代替プログラムが走らされ、そしてまた基本システムのさらに中枢を担うコンダクターがシステムから外されかかっている。

サスフォアはそこにつけこんで、コンダクターを破壊する事で、コンチェルト自体を停止させようとした。

しかし、一回は失敗し、今回ではすでにコンダクター無しで動くシステムを完成させてしまったようだ。

こうなると一人を相手にするのは違う。

コンチェルトを構成する、コンダクター以外のすべてのプログラムと戦わなくてはならないのだ。

しかも、自ずからコンチェルトの停止、破壊を考えていたコンダクターと違い、彼らは新システムが

完成した事でさらに力を強める事だろう。

(まったく、馬鹿な事を考えたものだ。)

そう自嘲すると、空間をあらためて見渡してみる。はるか遠くのほうに、やんわりとした光が見えた。目を凝らすように遠くを注視してみると、それが望遠鏡を覗いているように拡大され、その正体が解った。なにかの建造物にライトが当たり、その光の中に人間が立っていた。顔は見えなかったが、身体のポーズが不自然で、おそらく何かで拘束されているに違いない。

コンチェルトの中枢で拘束されている人間となれば一人しかない。

サスフォアは駆け出しながら、時計に目をやる。すでに、タイムアップまで残すところ一時間を切っていた。

Br

眼下には、巨大なクレーターが広がっており、その中央だけが突出して盛り上がっている。

階段状の建造物が天に向かって延び、その周囲をいくつかの豪華な椅子が取り巻いている。階段の上部、少し広くなったところに、人間が両手を拘束される形で捕らえられていた。

サスフォアは、階段の頂上に伸びる渡り廊下を見つめ、その人間に近づいたが、廊下はそこにつながる寸前で途切れ、そこへ渡る事はできなかった。しかし、すぐそこ、手を伸ばせば届きそうな場所まで、サスフォアは近づくと事ができた。

その人間は目を閉じたまま、何か瞑想にふけっているようにも見えた。そのとき、サスフォアは目を疑った、始めてみるコンダクターの素顔——。

「お、俺……??? コンダクターの姿は俺に似せてプログラムしてあるのか……?」

驚きの余り、叫び声に近い形の呟きとなった、というより、勝手に叫んでしまったといったほうが正

しいかもしれない。

「違うよ、サスフォア」

そういう声が聞こえて、サスフォアは我に返る。

その声質はサスフォアに近いように聞こえたが、こちらのほうが柔和な感じが漂っている。しかし、はっきりとした口調は、意志の強さが伺えた。

「サスフォア、君が僕に似ているんだ」

と、コンダクターは言う、目を開いた。美しい瞳だった。コンダクターは紛れも無い男性型のイメージだったが、この瞳は何か女性的な潤いを持っていて、気をつけなければ、その眼光に魅了されてしまいそうな気すらした。

「俺は……」

「君は、僕の遺伝情報を持って生まれてきたんだから似ている」

「遺伝? マザーコンピュータのプログラムに遺伝情報など含まれては——!」

いない、といいかけて、ある考えが頭を過ぎる。

「コンチェルトのシステムというのはまさか……」

「そのとおり、コンチェルトのシステムは本物の人間が動かしているんだ。ただし、もう肉体は使っていないが」

「人間がダイブして動かしていると、そういう事なのか？」

「今の形とは違う、肉体はすでに死んでいるから元には戻れない。脳だけを特殊な処理を施して生かしている、それに様々なプログラムが雪だるま式に取り付けて、肥大化したのが僕たちコンチェルトであってセカンダリワールドでもある」

「……この世界は、あんた達の頭の中なのか……？」

今まで叩き込まれてきたセカンダリワールドのイメージががらがらと崩れ去っていく喪失感をもって、サスフォアは呟いた。

「ただし、そういったシステムで動いているのは

僕たちだけで、他の一二番目以降のマザーコンピュータは完全な疑似人格プログラムによるものだ」

「俺は、何故生まれた……」

サスフォアは怒りや絶望感、疑問などがない交ぜになった複雑な感情をもってそうたずねた。

「俺はおまえの死んだ身体の、単なる代わりの器として生まれたのか？」

もしそうだったら、完全にそれは神への冒瀆となる。サスフォアの一番忌み嫌う事だった。命に変わりはしないのだ。代わりがいくらでもいる、というバカげた状況ができたのなら、生まれてくることに大変なパラドックスを内包する事になる。

死を前提にした生などあつてはならないのだ、人間は食肉用の家畜とは違う。

自分のために、代わりに生まれてきた自分を殺す事など、出来はしないはずだ。それが出来るのは、完全に狂気に陥った人間だけである。もはやそんなものは人間とは呼べない、唾棄すべき汚れたモノと

化す。

サスフオアは過去において、様々な機関、研究所のコンピュータに潜入しこのバカげた研究データをすみからすみまで探し出して、みんな消去してやった。おまけにコンピュータのシステムも破壊し尽くした。

ある程度の研究は十分に必要だろうことは理解できたが、この狂気に取り憑かれてしまう者が決して少なくない数居たのである。

「俺は一体なんなんだ！ なんの為に生まれてきた!?」

そう詰め寄ろうとするも、足場が途切れていて、コンダクターには近づけない。

「殺してやる！ おまえなど必要無い！ 殺してやる！」

「解っている、僕は消えるべきなのだ……だがその前に聞いてくれ、僕の利益のために君を生み出したのではないといえば、完全に嘘になる。僕はこの

システムの過ちに気付いた、だから、このシステムを破壊しようとしたが、コンチェルトの中枢である僕には強固なプロテクトがかかっている。いわゆる『自殺』ができないのだ。今でもそのことを悔いている、僕が消えればこのくだらないシステムは消え、セカンダリワールドも消滅するのだ、なのに自分からそれも出来ない。そして悔いているうちにこのザマだ。すでに僕はコンチェルトから不必要なシステムになってしまった……」

サスフオアはコンダクターのその言葉に、少し落ち着いて、

「自殺は罪悪だ、それは正しい。しかし、それと、この俺が生まれてきた事と、何の関係がある」

サスフオアの言葉にやや笑みを浮かべるが、それもすぐに憂いの帯びたものになり、

「考えが浅はかだったのかもしれない……同じ遺伝情報を持つ人間が居たのなら、互いに引き合っただけでたどり着き僕を消してくれるだろうと考え

た。しかし、私の脳であるセカンダリワールドに、同じ脳体系を持った者が入り込んできたときの予測が出来なかった……君が一度脳共鳴を起こしかけて死にそうになった事は……私の責任だ」

「それは半分は正しかったようだ、現に俺はここまでたどり着いた。……サステインの死の一端におまえの責任があるなら、なおさら俺の手でおまえを殺したい」

「そして——！」

何かを言いかけたとき、絶叫が空間にこだまする。コンダクターの身体が電流に打たれたようにスパークを起こし、身悶えしながら叫びつづける。

それが止んだとき、コンダクターは崩れ落ちそうになるが、拘束された手が宙に固定されていて、倒れる事を許されない。

「おしゃべりはそこで終わりだ、コンダクター」  
下方から男の声が響いてくる。見ると、豪華な椅子に九人の男が腰掛け、こちらを見ていた。椅子は

一〇脚あったが、その内一つが空席になっている。

代表とも見える、一人の男がサスフォアの目線まで上り来る。白髪の初老の男だ。

「もうそろそろ時間だ、我々がセカンダリワールドを、そしてプライマリワールドまでも統治する輝くべき第一歩を今踏み出す。だがその式典の来賓がたった一人とはな」

「式典を始めるには早いんじゃないか？ 空席があるぞ、遅刻か？」

「不必要になったのでね、消しただけだ。イレブンスはコンダクターと対になっている。コンダクターが居なくなればイレブンスも必要無い。……それに我々の世界で暴れまわり、破壊を続けるとは言語道断だ」

「笑わせる。欠陥だらけのシステムが……あんたたちが消したのは『トゥルー』イレブンスだったんじゃないのか？」

サスフォアは嘲笑するが、彼らは顔色一つ変えず

に、

「最初から完璧なシステムなど無い。欠陥があるなら、それを一つづつ解決していき、そして完成度をあげていくのだ」

「どうか、俺にははじめから救い用が無い風に見えるがね？」

「そう思えるのはおまえがコンダクターの遺伝コードを持っているせいだ、考え方までそっくりじゃないか。もっと客観的に見てみる、おまえの視野は非常に狭い」

「そういつて、手を後ろに組んだまま、ため息を吐く。」

「今のこの世界、人間はセカンダリワールドが無ければ生きてゆけない。プライマリワールドはそこにぶら下がっているに過ぎない。ならば、我々はセカンダリワールドの創造主として、この世界をもつと住みやすい世界にする義務がある、プライマリワールドには無い安らぎを提供し、理想郷を作り上げ

る責任があるのだ」

「馬鹿な、そもそもセカンダリワールドには生産性が無い。どうやって種を残していくつもりだ？ 実体の無いお前たちに」

「フン、コンダクターがおまえをどうやって生み出したと思う？ 我々には優れたジンデザインの技術と、そして最新の設備があるのだ。それに実体が無いだと？ 実体ならあるさ、とてつもなく大きな生き物の中にね……」

含み笑いを浮かべながら、目の前の男は嘲笑を続けた。

「さあ時間だ、さようならコンダクター……永遠に眠りつづけてくれ……」

サスフォアの時計のカウントがゼロを示した。

☞

「何故だ！？」

男は机を叩いて、初老の男に反論する。

「何故、冬音がコンチェルトのシステムから外されねばならないんだ!？」

「脳の構造の問題だ、我々男性型の脳と女性型の脳は混在できないのだよ」

「それではこのVR空間はどうなる? 男女を問わず利用するんだ、そんなことは言ってもらえないだろう?」

男は興奮して、初老の男の襟を掴んだ。

初老の男はそうさせたまま、

「頭を冷やせ、サスフォア。我々はシステムだ、彼らはそれを利用するだけに過ぎない。表面的な思考、行動の基本は変わらないが、システムは自律神経のようなものだ。混在は不可能だ」

「そんなのは理論に過ぎない!」

サスフォアはそういつて手を離すと、初老の男に背を向けて歩き出した。

「何をするつもりだ?」

「この僕が実証する、男女の脳の違いは関係ない、システムは混在できると!」

「無駄な事はよせ」

初老の男が諭すような口調で言う。その口調にサスフォアはますます頭に血を上らせる。まだ彼はとも若い技術者だった。

乱暴に扉が閉まる音が響くと、その部屋に居た九人の男たちはゆっくりと口を開く。

「うまくいったな……?」

「ああ、彼を動かすのは簡単だ。まあ、これで我々の計画の準備は完了した」

「あとは、我々がコンチェルトとなってからの仕事だ、みんな、ご苦労だった」

「世界は、われらの手中にある……」

□

ドクン……!!

ひとときわ大きな鼓動を感じて、イレブンスが目を開く。

その瞳からは大粒の涙が溢れ出し、次々と空間に消えていく。

今、すべての記憶が開き、コンチェルトの中枢に居るコンダクター、サスフォア・ソロの記憶までもがイレブンスに流れ込んできた。

「サスフォア……」

嗚咽にかき消されながらも、その言葉を呟く。

今すぐ彼らの側に行きたいが、もう動けそうに無かった。

その悔しさに、イレブンスは再び質の違う涙を流す。

すると、急に目の前が明るくなり、目の眩むような白光がイレブンスを照らし出した。

（死ぬという事はこういう事なのだろうか……私には死ぬの……？）

清らかで暖かい光の中で、イレブンスはそんな事を思ってしまう。

ゆっくりと閉じた瞳の裏に、いま、見た事の無い女性の姿が投影されていた。

それは青く美しい光を纏っていた……。

## D<AB>

初老の男が指を鳴らそうと、手を天に掲げる。その直後、男の腕に光の刃が突き刺さった。だが、血が流れる事も無く、うるさそうにその刃を握り潰した。

初老の男が天を仰ぎ、

「そのネズミたちも降りて来い、特別に式典に参加させてやろう」

その声の先には、二人の影があった。

『優れたジンデザイン』の割には欠陥品を二人も作り出すとは笑わせる。あんたたちもジョーク



が解るようだ」

聞き慣れたその声が響くと、頭上からトウコーダと麗美が降りてきて、サスフオアの脇に立った。トウコーダの姿はすでにボロボロで、麗美が支えていなければ立てないほどだったが、声や瞳には張りがあった。その中には、静かに燃える炎のような怒りが渦巻いている事が解る。

「欠陥品は排除すればいい。その教訓が未来に生きるのだ。その為に関違いを正す、今日のような第一歩が必要なのだ」

初老の男がコンダクターを見つめる。

「ではさらばだ、コンダクター」

今度こそ本当に、初老の男は指を鳴らすと、虹色の光がコンダクターの周りを取り巻き始める。

麗美達が少年に見たものと同じであったが、様子がおかしい。コンダクターの身に何も起きない。

「ん？ どうした！？」

初老の男が始めて焦りを露にして叫ぶ。下方に居

る八人の男たちも何があったか解らずにいろめきだっている。

「何があった！？」

「解りません！ コンダクターのプログラムが何らかによつて切り離されています！」

「見た事も無いプロテクトがかかっておる！ 信じられん！ 解析にどれくらいかかるものかわからんぞ！」

焦りの声がそこに飛び交う。

一方のサスフオアたちも何が起こったか解らない。呆気にとられるまま、虹色にそまったコンダクターを見つめていたが、ついにはコンダクターにかかっていった虹色の光も四散して、空間に消え去った。

その中でいち早くトウコーダが我に返り、

「チャンスだサスフオア！ 一気にコンチェルトを叩く！」

その声に、サスフオアは足場を蹴って、下方に飛び降り、それに麗美とトウコーダが続いた。

「消えて無くなれ!! コンチェルトオ!!」  
 叫ぶと、サスフォアは怒りを炎のような光の揺らめきに変え、身体に纏わせると、そのまま標的を選び、椅子に腰掛けていた男のうちの一人に体当たりをかませる。

その衝撃に、何人かの男が余波で飛ばされるが、比較的若い姿の男が特に激しく突き飛ばされ、階段状の建造物に当たって、その一部を破壊しながら建造物にめり込んだ。

建造物に空いた大穴は、スパークを弾かせながら、不気味にきしむ音を響かせている。

一瞬の間を置いて、そこから男が飛び出してくる。

「馬鹿な……」

男の表情は、もはや驚きのそれしか浮かべていない。

「死ねい！」

男は、初老の男がコンダクターを殺そうとした虹の光をその腕にはらませ、サスフォアめがけて突進

してくる。一つ瞬きをする瞬間にサスフォアの眼前に男が迫る。男がその腕をサスフォアの腹に押し当てると、その力を解放した。

本来ならば、跡形も無くそのイメージは破壊されて、そしてまたプライマリワールドでのサスフォアの脳は焼け、脳死状態とはほど遠い、全身から血を吹き出させて死ぬという惨たらしい姿になるはずだった。

だがしかし、今のサスフォアにはなぜかそれが通用しない。

その攻撃は、サスフォアの腹から背に抜けて、背後の渡り廊下を粉々に破壊した。さらにはその余波がセカンダリワールドに響き、大規模な空間の崩落、剥離を引き起こした。

轟音と共に、クレーターには亀裂が生じ、きな臭いにおいが充満している。

「な……」

驚愕に見開かれる男の瞳に、激しい怒りを露にし

たサスフォアの顔が映っている。

サスフォアの手刀がゆったりとしたスピードで、男の首に叩き込まれる。けして避けきれないスピードではなかったが、男は射すくめられて動けなかった。

その手が男に触れた瞬間、男は爆発をものに受けたような衝撃によって、真っ直ぐ下方に落ち、そしてクレーターの底面に衝突して激しいスパークを引き起こした。

そして、そのスパークの中に虹色の粒子を見た事で、その男のイメージが崩壊したことが解った。

同時期、麗美もトウコーダも圧倒的な攻撃力で一人、また一人とコンチュルトを構成していた男たちを消していく。

ものの数分で、八人の男を片づけると、サスフォアたちは、最後に残った初老の男を取り囲む。

初老の男は強靱だった。幾たびかの攻撃に耐え、返してくる攻撃は他の男たちのように完全に受け流

せる事はなく、かなりの衝撃を受けていた。それでも、サスフォアたちは倒される事無く、徐々に初老の男を追いつめたのだ。

また、コンチュルトの構成要素が極端に少なくなった事から、セカンダリワールドのイメージは崩壊しかかって、もはや世界を維持できる最低のラインを保っているに過ぎなかった。

息も絶え絶えになった初老の男は、

「……解った……、セカンダリワールドでは私の負けのようだ……しかし、何故だ……その力」

「さあな。だが、あんた達じゃなくて俺たちに不思議な力が備わった……という事は、セカンダリワールド自体があんた達を拒否するという事じゃないのか」

「ふふ、ふははははははっ」

初老の男は、肩を震わせて笑った。

サスフォア達は気が触れたのかと思ったが、彼の口からつぶられる言葉に青ざめる事になる。

「なるほど……力の差は歴然としてるが、お前たちは頭のほうが少し抜けているようだ……」

「何が言いたい？」

「私にだって実体はある、すでにその実体は動き出している……」

「!？」

「何故、トランスは破壊されたと思う……?」

口元に狂気的な笑みを浮かべて、初老の男は尋ねた。

私は、実体の無いコンチェルトに成り代わって動く身体を欲した。それでまず行政機関を裏から動かして人間たちを意のままに動かせるように、脳をコントロールするナノ・マシン、シナプス・ナノを開発した……。

これは半分失敗だった。感情や行動については問題はなくある程度の間操る事は出来たが、自律神経

系の制御ができなかったので、すぐに死んでしまう。しかし、大脳のデータを簡単に数値化できる事が解ったので、実験的に様々な人間の頭脳を取り入れ研究して様々なイレブンスの代替プログラムを作った。また実験的にそのプログラムをボージャーたちに移植してみたが、どれも思うようにはいかなかった。次に、アダムとイブを創り出したが、これは言わずもがなだったな……能力的にはまったく不遜はないが、完全な欠陥品だった。なあ、ソス。本来ならお前が私の実体になるはずだったのだ。

そこで私は考えたのだ、人間を操るにはどうしたらいいか。簡単な事だった、目の前においしそうなエサをぶら下げていればいいのだ。必ず人間はそれに食いつく。それで私はアルジャーノンとバードゥンに話を持ち掛けた、私に協力すればセカンダリワールドもプライマリワールドも思いのままに操れるようになるとな。

あの二国はわざと世界から孤立した。全世界に向

けての無言の宣戦布告をしたわけだ……「世界の頂点に立つのは我々だ、我々は選ばれたのだ」とな。

「何という事だ……」

「あなた、何をしたか解っているの？ 何人の人間が死んだと思っているの!？」

「そんな事に興味はない、目的は達成できたのだから……」

「おのれッ!」

麗美は激昂し、拳を初老の男の頬に叩き込んだ。

初老の男は高々と宙に舞い、クレーターに叩き付けられた。口から血とともに何本かの歯を吐き出すと、それは虹色の粒子となって空間に消える。顎の形も妙にひしゃげていて、喋るのが精一杯のようだった。

「……ただでは殺されん。もうすぐ私の……最後のプレゼントがお前たちの元に……届……く……」

言う初老の男のイメージは、虹色の光を残して、ゆっくりと空間に消えていく。その表情には最後まで笑みが浮かんでいた。

そのとき、サスフォアが用意していた監視モニターや監視センサーに何かが引つかかった。

その映像を開いてみると、何人もの武装した兵士が、オルガシテイの頂上に登り来る様子が映し出されている。それは紛れも無くバードウンの兵士たちだった。

セカンダリワールドにダイブしている人間は無防備だ、そのときに攻撃されれば一溜りも無い。早急にここから抜けて、応戦せねばならなかったが、もはやそんな時間はない。自分は死ぬものだと考えてここまで来たのだが、ただ一つ、心残りがあった。

「ごめん、空……君を守れなかつ……」

と、自分の部屋を客観的に見るカメラの画像を見て驚く。

空がバイザーをかぶって、セカンダリワールドに

ダイブしているのである。しかもログインした形跡も、どこに彼女が居るのかすら見つける事が出来ない。

「どういう事だ……」

呟いたそのとき、頭上に光が収束していき、それが女性の形を作り上げる。紛れも無く空のそれだった。

「空!?!」

空はコンダクターの元に降り立つと、彼の身体を優しく抱きしめる。

「君は……?」

「私の名前は空、あなたの望む安らぎを与えに来ました」

「空か……久しく見ていないな……」

「空!」

サスフォアは何が起こっているのか解らないといった表情で空を見つめている。

「ごめんなさい、黙っていたように思ったんだけど、

見つかっちゃったわね……でも、いつかは解る事だから」

空は言うのと、赤子をあやすように、コンダクターの頭を撫でる。

「サスフォア、みんな、ありがとう……出来る事なら最後にイレブンス……いや、冬音に会いたかった……」

コンダクターはそう笑うと、空の胸に頭を埋めた。コンダクターは空の腕の中で美しい金色の光の粒子を振りまきながら消えていく。

その途端、轟音を立ててセカンダリワールドが揺れた。

コンチェルトのシステムを失って、今まさに崩壊を始めたところだった。

「空……何故……?」

「今話している暇はないわ、早くここを抜けましょう! 兵士たちが来てしまうわ」

「イレブンス、イレブンスはどうなったの!?!」

麗美は、空に詰め寄る。

「彼女は私たちがここを抜けるまでの時間稼ぎをしてくれています、彼女がコンチェルトのシステムを一部代替しているのです」

そういうと、空は上空に白色に輝く空間を作り出す。

セカンダリワールド表層への近道だった。空は、人為的に〈風〉を創り出していた。

そして、サスフォアたちは、それを通って表層に抜け、セカンダリワールドを脱出した。





サイレント・オペレーション

セカンダリワールドから抜けた俺たちは、やってきた兵士たちを迎え撃ったが、あっけなく撃退してしまった。

セカンダリワールドが消失したおかげで、兵士たちは情報の統制が取れなくなったのだろう。

また、麗美とイレブンスの状況が少し気にはなつたが、おそらく心配は要らないはずだ。

コンチエルトは活動を止めたわけだが、ほかのマザーコンピュータは単なるコンピュータとして動いている。設定の再セットアップが必要になるだろうが、イレブンスの『睡眠』は継続していけるだろう。

空は、一世界生活者である。

一世界生活者とは、セカンダリワールドに依存しない人間である。

いや、依存していないように見えるのだ。

彼らは完璧なハッカーの集団だった。ログインや行動の形跡を一切残さないという、信じられない芸

当をやつてのけていた。

彼らは隠れて行動し、俺たちのようなセカンダリワールドを破棄しようと考えている人間たちにこつそりと力を与えていた。

コンチエルト中枢での聖なる光、最後の戦いでの圧倒的なパワー、脳共鳴の減少。そのすべてが彼らによるものだったのだ。

とにかく俺たちは、空、彼女に協力していたと思いついでいたが、まったくその逆だった。

そのことを聞いたとき、俄かには信じがたい思いがしたが、間違いなく、俺はセカンダリワールドで彼女に助けられたのだ。

また、コンチエルトは活動を止めたわけだが、物理的にはまだアンビエントの街の地下深くに存在している。しばらくして麗美達と再会した俺たちは、万全を期すために、その破壊に赴いた。

物理的破棄のほうに、いままで俺たちがしてきた

戦い方よりも楽かと思われるかもしれないが、そうではない。

セカンダリワールドでは超絶的な力を発揮できるかもしれないが、いくらサバイバル技術に長けていても現実世界では一人の人間に過ぎない。

そもそも、コンチェルトに戦いを挑む馬鹿など俺たち以外には居ないのだ。

たった数人でそこへ忍び込み、すべてを破壊する事の難しさは、並大抵ではない。すべての行動をコンチェルトに監視されている。コンチェルトの『目』から逃れる事は出来ないに違いない。

今、目の前にしたコンチェルトの実際の中核は、思いのほか狭かった。

一一個のカプセルの中に、何かが浮いている。カプセルには〈1st〉から〈11th〉までの刻印がそれぞれ記されており、〈1st〉の刻印の下には、

〈Conductor / Susfour Solo〉と刻まれていた。また、同様に〈11th〉には、〈Tone Solo〉とだけ刻まれている。

だが、〈11th〉のカプセルはからっぽで、中にはなにも入っていない。

その他のカプセルには濁った溶液の中に、ぶよぶよとした脳髓が浮いている。カプセルのガラス面を叩いただけで、その組織が剥離しそうなほどに腐っているような感じさえする。

だがしかし、ただ一つ、〈1st〉の溶液や内容だけは正常で、さらりとした淡い青色をした水の中に二人の人間が寄り添って入っていた。

一人は俺のオリジナルである。髪の毛の長さや肌の色が違うが、紛れも無く俺だった。

もう一人はイレブンスにそっくりの女だった。その表情は安らかで、かすかに笑みを浮かべているようでもあった。

俺がそれに見とれていると、トゥコーダが肩を叩

いた。

遠くのほうで、炎が上がっている。

コンチェルトに仕掛けた爆弾が爆発し、すべてを炎の中に沈めたのである。

それを見つめていると、イレブンスが何かを呟いた。

『ありがとう、終わりの見えない協奏曲はここで演奏を終えることができた。沈黙の喝采を以って、君たちへの最大の感謝とする——コンダクター、サスフォア・ソロ』

それが、どうやってイレブンスに届いたのかは解らなかったが、サスフォア・ソロからの最後の通信だった。

今、空を見上げると、一片の雪が俺の額に舞い下りた。

完